

Veritas NetBackup 管理者 ガイド (高可用性環境)

Windows、UNIX、Linux 用

リリース 8.0

マニュアルバージョン: 2.7.1

法的通知と登録商標

Copyright © 2015 Veritas Technologies LLC. All rights reserved.

Veritas、Veritas ロゴは Veritas Technologies LLC または同社の米国とその他の国における関連会社の商標または登録商標です。その他の会社名、製品名は各社の登録商標または商標です。

この製品には、サードパーティ（「サードパーティプログラム」）の所有物であることをベリタスが示す必要のあるサードパーティソフトウェアが含まれている場合があります。サードパーティプログラムの一部は、オープンソースまたはフリーソフトウェアライセンスで提供されます。本ソフトウェアに含まれる本使用許諾契約は、オープンソースまたはフリーソフトウェアライセンスでお客様が有する権利または義務を変更しないものとします。サードパーティプログラムについて詳しくは、この文書のサードパーティの商標登録の付属資料、またはこの製品に含まれる TPIP ReadMe File を参照してください。

本書に記載されている製品は、その使用、コピー、頒布、逆コンパイルおよびリバースエンジニアリングを制限するライセンスに基づいて頒布されています。Veritas Technologies LLC からの書面による許可なく本書を複製することはできません。

本書は、現状のままで提供されるものであり、その商品性、特定目的への適合性、または不侵害の暗黙的な保証を含む、明示的あるいは暗黙的な条件、表明、および保証はすべて免責されるものとします。ただし、これらの免責が法的に無効であるとされる場合を除きます。Veritas Technologies LLC は、本書の提供、内容の実施、また本書の利用によって偶発的あるいは必然的に生じる損害については責任を負わないものとします。本書に記載の情報は、予告なく変更される場合があります。

ライセンス対象ソフトウェアおよび資料は、FAR 12.212 の規定によって商業用コンピュータソフトウェアと見なされ、場合に応じて、FAR 52.227-19「Commercial Computer Software - Restricted Rights」、DFARS 227.7202、「Commercial Computer Software and Commercial Computer Software Documentation」、その後継規制の規定により制限された権利の対象となります。業務用またはホスト対象サービスとしてベリタスによって提供されている場合でも同様です。米国政府によるライセンス対象ソフトウェアおよび資料の使用、修正、複製のリリース、実演、表示または開示は、本使用許諾契約の条項に従ってのみ行われるものとします。

Veritas Technologies LLC
500 E Middlefield Road
Mountain View, CA 94043

<http://www.veritas.com>

テクニカルサポート

テクニカルサポートは、世界中にサポートセンターを有しています。テクニカルサポートの主な役割は、製品の特徴や機能に関する具体的な問い合わせに対応することです。テクニカルサポートグループは、オンラインナレッジベースのコンテンツも作成します。テクニカルサポートグループは、その他の部門と連携して、迅速にお客様の質問に回答します。

ベリタスが提供しているメンテナンスには、次のものが含まれます。

- 任意のサイズの組織に合わせた適切な量のサービスを選択できる柔軟性を備えた幅広いサポートオプション
- 迅速な応答と最新の情報を提供する、電話および/または **Web** によるサポート
- ソフトウェアアップグレードを配信するアップグレード保証
- 各地域の営業時間、または年中無休の **24 時間体制**のグローバルサポートを購入可能
- アカウント管理サービスを含むプレミアムサービスの提供

ベリタスが提供しているメンテナンスについて詳しくは、次の **URL** の **Web** サイトを参照してください。

www.veritas.com/support

すべてのサポートサービスは、お客様のサポート契約およびその時点でのエンタープライズテクニカルサポートポリシーに従って提供されます。

テクニカルサポートへの連絡

現在有効なサポートについての同意事項をお持ちのお客様は、次の **URL** でテクニカルサポートにアクセスできます。

www.veritas.com/support

テクニカルサポートに連絡する前に、製品のマニュアルに一覧表示されているシステム要件を満たしていることを確認します。

テクニカルサポートに連絡するときは、次の情報が使用できるようにしてください。

- 製品のリリースレベル
- ハードウェア情報
- 使用可能なメモリ、ディスク容量および **NIC** の情報
- オペレーティングシステム
- バージョンおよびパッチレベル
- ネットワークポロジ

- ルーター、ゲートウェイおよび IP アドレスの情報
- 問題の説明:
 - エラーメッセージとログファイル
 - テクニカルサポートに連絡する前に行ったトラブルシューティング
 - 最近のソフトウェア構成の変更およびネットワーク変更

ライセンスおよび登録

製品の登録またはライセンスキーが必要な場合には、次の URL にあるテクニカルサポートの Web ページにアクセスします。

www.veritas.com/support

カスタマーサービス

カスタマーサービスの情報は次の URL で利用できます。

www.veritas.com/support

カスタマーサービスは、次の問題のような技術的でない質問に利用可能です。

- 製品のライセンスまたはシリアル化に関する質問
- 住所または名前変更のような製品登録の更新
- 製品の一般情報 (機能、対応言語、地域の取り扱い業者)
- 製品の更新およびアップグレードについての最新情報
- アップグレード保証およびサポート契約についての情報
- テクニカルサポートのオプションに関するアドバイス
- 発売前の技術的なことではない質問
- CD-ROM、DVD、またはマニュアルと関連した問題

サポート契約のリソース

既存のサポート契約に関してベリタス社にお問い合わせの際は、次に記載する対象地域のサポート契約管理チームにお問い合わせください。

世界共通 (日本を除く)

CustomerCare@veritas.com

日本

CustomerCare_Japan@veritas.com

目次

テクニカルサポート	3
第 1 章 このマニュアルについて	9
このマニュアルの内容	9
高可用性の環境の NetBackup と関連している文書	10
第 2 章 単一障害点に対する NetBackup の保護	11
コンポーネントのエラーからの保護について	11
ネットワークリンクエラーからの保護について	13
ストレージデバイスの接続エラーからの保護について	13
ストレージデバイスのエラーからの保護について	14
メディアの可用性エラーからの保護について	14
マスターサーバーのエラーからの保護について	15
メディアサーバーのエラーからの保護について	16
LAN クライアントのエラーからの保護について	19
SAN クライアントのエラーからの保護について	20
サイトのエラーからの保護について	20
高可用性環境でのカタログの保護について	21
クラスタへのメディアサーバーのインストールについて	22
NetBackup クラスタの仮想ストレージユニットについて	22
第 3 章 カタログバックアップとリカバリを使用したサイトディ ザスタリカバリについて	28
カタログリカバリについて	28
完全カタログリカバリについて	29
完全カタログリストアの実行	30
完全カタログリストア後の DR 環境の一貫性の保持	32
部分的なカタログリカバリについて	32
部分的なカタログリストアの実行	33
部分的なカタログリストア後の DR 環境の一貫性の保持	34
DR ドメインのディスクリカバリについて	34
単一ドメインレプリケーションの DR 環境でのディスクリカバリ	35
自動イメージレプリケーション	35
クロスドメインレプリケーションの DR 環境でのディスクリカバリ	35

第 4 章	自動イメージとカタログレプリケーションによるサイトの損失保護について	37
	自動イメージレプリケーション (AIR) について	37
	NetBackup カatalogレプリケーションについて	37
	レプリケートされた NetBackup カatalogのサポートの条件について	38
	カタログの同期について	40
	複数サイト単一ドメインレプリケーションについて	40
	複数サイトクロスドメインレプリケーションについて	43
	完全カタログレプリケーションについて	45
	部分的なカタログレプリケーションについて	48
第 5 章	完全カタログレプリケーションを使った NetBackup マスターサーバーの配備	51
	レプリケーションの注意事項について	51
	カタログレプリケーションを使用するクラスタ化されていない NetBackup マスターサーバーについて	52
	カタログレプリケーションを使用するクラスタ化されていない NetBackup マスターサーバーのインストールと構成	53
	カタログレプリケーションを使う、グローバルにクラスタ化された NetBackup マスターサーバーについて	59
	カタログレプリケーションを使うグローバルにクラスタ化された NetBackup マスターサーバーのインストールと構成	59
	EMM のサーバー表の表示	62
	クラスタ化されたレプリケーション構成での NetBackup のアップグレード	62
	セカンダリマスターサーバークラスタへのフェールオーバー	63
	クラスタ化されたレプリケーション環境での NetBackup マスターサーバークラスタのテスト	64
第 6 章	クラスタでの NetBackup を使用したバックアップおよびリストア	65
	クラスタでの NetBackup を使用したバックアップとリストアについて	65
	クラスタでの NetBackup を使用したユーザー主導バックアップ	66
	クラスタ内のデータのリストアについて	66
	クラスタでサポートされる NetBackup アプリケーションエージェントについて	68
	クラスタ内のデータベースファイルのバックアップについて	69
	ユーザーバックアップについて	69
	クラスタ内の NetBackup クライアントについて	69

索引 71

このマニュアルについて

この章では以下の項目について説明しています。

- [このマニュアルの内容](#)
- [高可用性の環境の NetBackup と関連している文書](#)

このマニュアルの内容

『NetBackup 高可用性の環境管理者ガイド』は、NetBackup の可用性を高くするための各種方式を説明し、単一障害点から NetBackup を保護するためのガイドラインを示します。

このマニュアルは NetBackup に基づくデータ保護システムのコンポーネントについて説明します。特定のサイト内の障害のリスクを減らし、サイトの損失からリカバリするためのさまざまな構成とソリューションの概要を示します。

このマニュアルは、カタログリカバリとカタログレプリケーションの処理を説明しているので NetBackup のサイトディザスタリカバリ計画を作成するために使うことができます。ただし、このマニュアルはすべての NetBackup 環境に明確なディザスタリカバリ計画を提供するようには意図されていません。その代わり、ユーザーの NetBackup 環境に固有のサイトディザスタリカバリの計画を開発するためにこの情報を使うことができます。

このマニュアルは、NetBackup マスターサーバーのインストールとアップグレードのガイドラインも示します。また、クラスタ化された NetBackup マスターサーバーとクラスタ化されていない NetBackup マスターサーバーの間でカタログがレプリケートされときの操作方法を示します。

このマニュアルは使われるクラスタテクノロジーまたはレプリケーションテクノロジーの詳細については説明しません。レプリケーション層の配置と操作について詳しくは、特定のレプリケーションテクノロジーのマニュアルを参照してください。NetBackup マスターサーバーのクラスタ化について詳しくは、次を参照してください。『[NetBackup マスターサーバーのクラスタ化管理者ガイド](#)』。

p.10 の「[高可用性の環境の NetBackup と関連している文書](#)」を参照してください。

高可用性の環境の NetBackup と関連している文書

『NetBackup 高可用性の環境管理者ガイド』を参照するときはまた次に挙げる文書を参照する必要がある場合もあります。

- NetBackup のクラスタ化について詳しくは、『[NetBackup マスターサーバーのクラスタ化管理者ガイド](#)』を参照してください。
- NetBackup のインストールについて詳しくは、『[NetBackup™ インストールガイド](#)』を参照してください。
- NetBackup についての一般情報について詳しくは、『[NetBackup 管理者ガイド](#)』の Vol. 1 と Vol. 2 を参照してください。

単一障害点に対する NetBackup の保護

この章では以下の項目について説明しています。

- [コンポーネントのエラーからの保護について](#)
- [サイトのエラーからの保護について](#)
- [高可用性環境でのカタログの保護について](#)
- [クラスタへのメディアサーバーのインストールについて](#)

コンポーネントのエラーからの保護について

NetBackup はいくつかの異なるコンポーネントで構成されています。それぞれにバックアップ処理かリストア処理を失敗または中断する可能性があります。

[表 2-1](#) に、コンポーネントレベルの障害点と、関連する保護方式を示します。

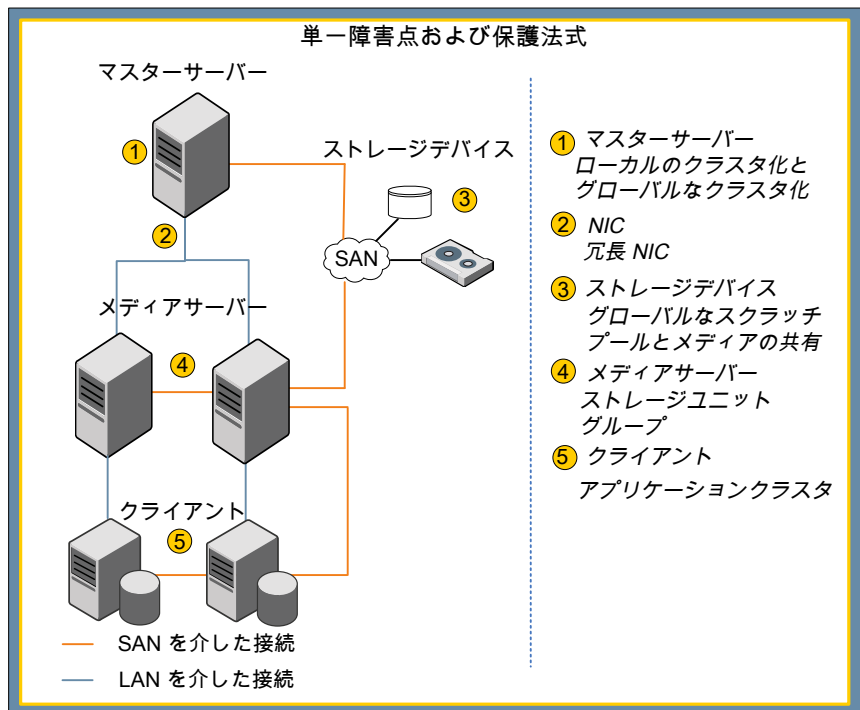
表 2-1 コンポーネントのエラーに対する NetBackup の保護

障害点	保護方式
ネットワークリンク	p.13 の「 ネットワークリンクエラーからの保護について 」を参照してください。
ストレージデバイスの接続	p.13 の「 ストレージデバイスの接続エラーからの保護について 」を参照してください。
ストレージデバイス	p.14 の「 ストレージデバイスのエラーからの保護について 」を参照してください。
メディアの可用性	p.14 の「 メディアの可用性エラーからの保護について 」を参照してください。

障害点	保護方式
マスターサーバー	p.15 の「マスターサーバーのエラーからの保護について」を参照してください。
メディアサーバー	p.16 の「メディアサーバーのエラーからの保護について」を参照してください。
LAN クライアント	p.19 の「LAN クライアントのエラーからの保護について」を参照してください。
SAN クライアント	p.20 の「SAN クライアントのエラーからの保護について」を参照してください。

図 2-1 は各種 NetBackup コンポーネントと単一障害点を示しています。単一障害点は、コンポーネントの可用性を高くするか、または冗長性を確保するために複数のコンポーネントを配備することによって各コンポーネントレベルで回避できます。

図 2-1 単一障害点と保護方式



ネットワークリンクエラーからの保護について

バックアップ通信の大半は、それぞれ約 8 MB/秒と 65 MB/秒の転送速度を提供する 100 MB と 1 GB の速度のネットワーク接続を介して転送されます。ネットワークリンクの可用性を高くするには、冗長ネットワークのチーミングを配備します。コストを考慮する必要があるため、多くの場合ネットワークのチーミングはバックアップサーバーとミッションクリティカルなクライアントにのみ制限されます。ミッションクリティカルでないクライアントには単一のネットワーク接続があり、接続エラー（とそれに続くバックアップエラー）のリスクは受け入れられます。

ストレージデバイスの接続エラーからの保護について

ストレージデバイスとそのコントローラへの接続も単一障害点となります。接続エラーの場合、デバイスは使うことができません。

p.13 の「[SAN 接続エラーからの保護について](#)」を参照してください。

p.13 の「[ロボット制御接続エラーからの保護について](#)」を参照してください。

SAN 接続エラーからの保護について

NetBackup の SAN クライアントはクライアントからメディアサーバーへの SAN 接続もサポートしますが、一般に SAN 接続はバックアップサーバーとバックアップストレージの間に存在します。いずれの場合も、SAN 接続エラーから NetBackup を保護するには、ソースとターゲットのコンポーネント間に冗長な接続を提供するように SAN を構成する必要があります。

ほとんどの SAN 接続されたディスクアレイは冗長な SAN 接続を持ち、動的マルチパス (DMP) ソフトウェアをサポートします。この冗長性によって 1 つのパスが失敗してもストレージへの接続が保持されます。多くの場合、DMP ソフトウェアはまたディスクストレージ間のデータ転送速度を改善するために SAN 接続を介した通信の負荷を分散します。

多くの SAN 接続されたテープデバイスはまた冗長性を確保するために 2 つの接続を提供することによって、2 つの別々のデバイスとしてサーバーに表示されます。マルチパスの選択は動的ではありません。NetBackup は最初に検出した利用可能なパスを選択し、常にそのパスを使います。2 つ目のデバイスパスは最初のパスが壊れている場合にのみ使われます。

ロボット制御接続エラーからの保護について

テープベースのバックアップ環境では、ロボット制御接続は単一障害点となる可能性があります。テープライブラリに指示を送信できない場合は、テープドライブが利用可能でも、バックアップとリストアの操作を行うことはできません。

Sun STK ACSLS、Quantum ATM のようなテープライブラリは、ライブラリから独立しているサーバーで動作する専用の制御ソフトウェアを使います。そのような制御サーバーは

クラスタ化できます。メディアサーバーはライブラリのスロットとドライブ間のテープの移動を処理する制御サーバーに要求を送信します。

他のテープライブラリは制御指示用の **NetBackup** マスターサーバーからライブラリへのデバイスの直接接続に依存します。このデバイスの接続が失われると、テープライブラリを使うことはできません。**SAN** 接続されたテープライブラリは、冗長性を確保するためにロボット制御への複数の接続をサポートします。サーバーエラーから保護するようにこれらの接続を構成できます。たとえば、クラスタ化されたマスターサーバーの各ノードに 1 つのパスを構成できます。パスが同時にはアクティブになっていないことを確認してください。パスが両方ともアクティブな場合は、競合する指示が発行され、バックアップエラーかデータ損失という結果になる可能性があります。

ストレージデバイスのエラーからの保護について

テープであろうとディスクであろうと、ストレージデバイスが失敗すると単一障害点であるとなみなされます。ストレージデバイスのエラーから保護するには、バックアップターゲットとして複数のデバイスが必要です。

1 つのテープドライブのみにアクセスするメディアサーバーはそのテープドライブが停止するとテープへのバックアップを完了できません。そのようなエラーから **NetBackup** を保護するには、少なくとも 2 つのテープドライブにアクセスするようにメディアサーバーを構成します。メディアサーバーの間で共有できる **SAN** 接続されたテープドライブを使います。この共有によって、テープドライブは多数の冗長なデバイスを必要とせずにアクセス可能になります。通常、1 つか 2 つの冗長なドライブは耐性を提供し、バックアップが進行中の間にリストア操作を可能にします。たとえば、5 つのテープドライブを共有するように 4 つのメディアサーバーを構成すると、1 つのドライブが停止してもバックアップはまだ実行できます。バックアップは時間がかかる場合がありますが、完了し、データは安全なままです。メディアサーバーが異なるタイミングでバックアップを実行すると、サーバーに対するテープドライブの比率はバックアップエラーの危険を冒さずにさらに低くなる場合があります。

AdvancedDisk ディスクプールは、単一のディスクデバイスのエラーから保護するために個々のメディアサーバーに作成できます。

メディアの可用性エラーからの保護について

テープベースのバックアップソリューションでは、適切なテープメディアがバックアップジョブに利用可能でなければエラーが発生する場合があります。**NetBackup** を使うと、グローバルなスクラッチプールとメディア共有によってそのようなエラーのリスクを減らすことができます。

表 2-2 はメディアの可用性エラーに対する保護方式を説明しています。

表 2-2 メディアの可用性エラーに対する NetBackup の保護

保護方式	説明
グローバルなスクラッチプール	テープに書き込まれるすべてのバックアップジョブと複製ジョブでは、バックアップデータと同じ保持基準の特定のメディアプールにあるテープを使います。適切なテープが利用可能でなければ、バックアップは失敗します。 グローバルなスクラッチプールは、オンデマンドで特定のメディアプールに自動的に再割り当てできる未割り当てのテープを保持する NetBackup メディアプールです。たとえば、バックアップジョブまたは複製ジョブが実行され、ジョブによって指定済みのメディアプールで適切なテープが利用可能でないとします。その場合、未割り当てのテープはグローバルなスクラッチプールから指定済みのメディアプールに転送され、バックアップジョブのために使われます。このテープは、期限切れになると、再利用のためにグローバルなスクラッチプールに自動的に戻されます。 グローバルなスクラッチプールを使うと、ジョブによって指定済みのメディアプールに関係なく、すべての未割り当てのテープが任意のバックアップジョブで利用可能になります。
メディアの共有	メディアの共有は部分的に使用されているテープを空きがなくなるまで複数のメディアサーバーで使うことを可能にします。テープを最も効率的に使用します。一度に 1 つのメディアサーバーのみテープに書き込むことができます。そのテープが使用中でないとき、そのメディアプールからのテープを必要とする別のメディアサーバーがそれを使うことができます。 メディア共有を有効にするには、[部分的に使用されているメディアの最大数 (Maximum number of partially full media)] プロパティを使うように[ボリュームプール (Volume Pool)] プロパティを設定してください。このプロパティはメディアプール内の部分的に使用されているテープの数を制限します。すべてのテープの空きがなくなるまで、空きテープをプールに割り当てることはできません。1 つのテープの空きがなくなるまで、別の空きテープをプールに割り当てることはできません。

マスターサーバーのエラーからの保護について

各 NetBackup ドメインの単一のマスターサーバーがドメイン内のすべてのバックアップ処理を制御します。したがって、マスターサーバーはデータ保護環境の最も明らかな単一障害点となります。マスターサーバーなしで、バックアップとリストアを行うことはできません。そのようなエラーから NetBackup を保護するには、マスターサーバーの可用性を高くする必要があります。NetBackup は次のクラスタテクノロジーを使用してマスターサーバーのクラスタ化をサポートしています。

- Windows Server Failover Clustering (旧名 MSCS)
- Veritas Cluster Server Windows 2003、2008、2008R2
- UNIX または Linux 上の Veritas Cluster Server

- HP Service Guard
- HACMP for AIX

これらのクラスタ技術を使う NetBackup のインストールと構成について詳しくは、『NetBackup マスターサーバーのクラスタ化管理者ガイド』を参照してください。

仮想マシンで動作しているマスターサーバーはハイパーバイザの高可用性ツールを使って保護できます。詳しくは、https://www.veritas.com/support/ja_JP/article.000006177 を参照してください。

メディアサーバーのエラーからの保護について

メディアサーバーは冗長ネットワークと SAN 接続で構成できますが、サーバー自身は単一障害点のままとなります。メディアサーバーのエラーに対して NetBackup を保護する方式は使うメディアサーバーの種類によって変わることがあります。

表 2-3 は各種メディアサーバーと保護方式をリストしています。

表 2-3 メディアサーバーの種類と保護方式

メディアサーバーの種類	説明
専用のメディアサーバー	メディアサーバーのソフトウェアのみ実行し、他のシステムから排他的なバックアップを行います。 p.16 の「専用のメディアサーバーのエラーからの保護について」を参照してください。
非専用のメディアサーバー	バックアップを必要する他のアプリケーションも実行します。また他のシステムからのデータもバックアップします。 p.17 の「非専用のメディアサーバーのエラーからの保護について」を参照してください。
SAN メディアサーバー	バックアップを必要する他のアプリケーションも実行します。他のシステムからのデータはバックアップしません。 p.18 の「SAN メディアサーバーのエラーからの保護について」を参照してください。

専用のメディアサーバーのエラーからの保護について

ストレージユニットグループは単一のメディアサーバーのエラーから NetBackup を保護するために使うことができます。ストレージユニットグループはまた複数のメディアサーバーに負荷を分散してバックアップとリストアの最適なパフォーマンスを実現するために使うことができます。

表 2-4 はストレージユニットグループを構成できる各種モードを説明しています。

表 2-4 ストレージユニットグループを構成するためのモード

モード	説明
フェールオーバー	フェールオーバーモードでは、メディアサーバーが停止していない限り、最初のストレージユニットが常に使われます。余分なジョブは次のストレージユニットに送信されるのではなく、キューに投入されます。フェールオーバーモードは 2 つのメディアサーバーがアクティブクラスタかパッシブクラスタとして構成されている場合と同様に機能します。
優先	優先モードでは、リストの最初の利用可能なストレージユニットが使われます。このモードでは、ストレージユニットで処理可能な合計数を超えるジョブはリストの次のストレージユニットに送信されます。メディアサーバーが停止している場合は、すべてのバックアップが次のストレージユニットに送信されます。
ラウンドロビン	ラウンドロビンモードでは、各ジョブに対してリストから異なるストレージユニットが周期的に使われます。各ストレージユニットが異なるメディアサーバーにある場合、これは負荷分散のしくみとして機能します。
負荷分散	負荷分散モードは Flexible Disk と Media Manager のストレージユニット形式でのみ動作します。負荷分散モードでは、 NetBackup は各メディアで利用可能なアクティビティとリソースの確認を実行します。確認は負荷が最も軽いメディアにバックアップが送信される前に実行されます。

ベストプラクティスとして、優先グループとフェールオーバーグループを使って 2 つのストレージユニットグループを構成するときは 2 つのメディアサーバーを次の通り使います。

- 単一のストレージユニットを持つように各メディアサーバーを構成します。従って、たとえば、ノード A は STU A を持ち、ノード B は STU B を持ちます。
- ストレージユニットを持つ 2 つのストレージユニットグループをそれぞれに固有の順序で構成します。この例では、SUG AB は STU A、その後に STU B を含んでいます。SUG BA は STU B、その後に STU A を含んでいます。
- それから、バックアップポリシーは SUG AB と SUG BA の間で均等に共有されます。

操作の間、バックアップ通信は通常 2 つのノードの間で共有されますが、一方のノードが失敗すると、すべてのバックアップが自動的に他方のノードに移動します。

非専用のメディアサーバーのエラーからの保護について

ストレージユニットグループは非専用のメディアサーバーのエラーから保護するために使うこともできます。ただし、そのような使用方法では、特定のメディアサーバーで実行される他のアプリケーションはそのメディアサーバーのエラーから保護されません。非専用のメディアサーバーは、他のアプリケーションをサポートしているクラスタの一部である場合があります。これらのアプリケーションは仮想ストレージユニットを使って保護できます。

p.22 の「[NetBackup クラスタの仮想ストレージユニットについて](#)」を参照してください。

SAN メディアサーバーのエラーからの保護について

通常メディアサーバーとは違って、SAN メディアサーバーは自身のみを保護します。SAN メディアサーバーは通常のメディアサーバーと同様にバックアップストレージに直接接続します。ただし、ネットワークリンクまたは SAN リンクを介して他のクライアントシステムからデータは受信しません。

通常、SAN メディアサーバーは、多くの場合にクラスタ化されている大規模のミッションクリティカルなアプリケーションをサポートするサーバーに配備されます。アプリケーションはクラスタ化されていることがありますが、SAN メディアサーバー自体をクラスタ化する必要はありません。その代わりに、クラスタの各メンバーノードに SAN メディアサーバーソフトウェアをインストールし、クラスタで使われる仮想名ごとに NetBackup EMM にアプリケーションクラスタ定義を作成します。その後、メディアサーバーとしてクラスタの仮想名を使ってストレージユニットを作成します。特定の仮想名に関連付けられているアプリケーションは、バックアップ用に同じ仮想名に関連付けられているストレージユニットを使います。

p.22 の「[クラスタへのメディアサーバーのインストールについて](#)」を参照してください。

代替メディアサーバーを使ったテープバックアップのリストア

通常、ファイルをリストアするとき、NetBackup では元のバックアップに使ったのと同じメディアサーバーとクライアントを使うことが想定されます。しかし、ディザスタリカバリの場合、別のクライアントにバックアップをリストアするために別のメディアサーバーを使います。ディザスタリカバリサイトのメディアサーバーとクライアントはプライマリサイトのメディアサーバーとクライアントとは異なる名前である可能性が高いです。

NetBackup は、元のメディアサーバーを利用できない場合にリストアを処理するようにリストア用のフェールオーバーメディアサーバーを構成することを可能にします。

リストア用のフェールオーバーメディアサーバーを設定する方法:

- Windows マスターサーバーでは、NetBackup 管理コンソールを使ってリストア用のフェールオーバーメディアサーバーを構成できます。
[ホストプロパティ (Host Properties)]>[マスターサーバー (Master Server)]>[リストアのフェールオーバー (Restore Failover)]に移動します。
- UNIX と Linux のマスターサーバーでは、bp.conf ファイルに
FAILOVER_RESTORE_MEDIA_SERVER エントリを作成する必要があります。

代替メディアサーバーを使ったディスクバックアップのリストア

NetBackup は複数のメディアサーバー間でディスクストレージプールを共有できます。デフォルトではリストアの間 NetBackup はジョブの負荷を分散し、バックアップを作成したメディアサーバーではなく、最もビジー状態でないメディアサーバーにリストアを自動的に指示します。ただし、リストアを実行するように選択されたメディアサーバーが SAN メ

メディアサーバーとしてライセンスを取得済みであるか、またはリストアを必要とするクライアントへのネットワークアクセスを持っていない場合は、この処理によって問題が発生する可能性があります。

この問題が発生した場合に利用可能なオプションが 3 つあります。

- 強制リストア用のメディアサーバー設定を次のように構成します。
 - UNIX と Linux のマスターサーバーでは、`bp.conf` ファイルに `FORCE_RESTORE_MEDIA_SERVER` エントリを作成します。
 - Windows マスターサーバーでは、NetBackup 管理コンソールでこの設定を定義できます。
[ホストプロパティ (Host Properties)] > [マスターサーバー (Master Server)] に移動します。
この設定はサーバーごとに機能します。バックアップを作るために使われるメディアサーバーに基づいて、リストア操作のためにメディアサーバーを指定することを可能にします。バックアップとリストアを行うために同じメディアサーバーが使われるようにするには、バックアップサーバーとリストアサーバーに同じ名前を指定します。
- 次の通り、タッチファイル `USE_BACKUP_MEDIA_SERVER_FOR_RESTORE` を作成します。
 - UNIX と Linux マスターサーバーでは、`/usr/opensv/netbackup/db/config` にファイルを作成します
 - Windows マスターサーバーでは、`<install path>%veritas%netbackup%db%config` にファイルを作成します。
`USE_BACKUP_MEDIA_SERVER_FOR_RESTORE` はグローバル設定であり、バックアップをしたサーバーに常に強制的にリストアします。

メモ: `USE_BACKUP_MEDIA_SERVER_FOR_RESTORE` タッチファイルが作成されると、すべての `FAILOVER_RESTORE_MEDIA_SERVER` と `FORCE_RESTORE_MEDIA_SERVER` の設定は無視されます。

- `bprestore -disk_media_server` コマンドを使ってコマンドラインからリストアを実行します。この設定はジョブごとに機能します。また特定のリストアジョブに必要なメディアサーバーを指定することも可能にします。他の 2 つのオプションとは違って、この設定は動的であり、必要に応じて適用できます。

LAN クライアントのエラーからの保護について

NetBackup クライアントパッケージ (アプリケーションエージェントを含む) はクラスタ対応ではないため、NetBackup クライアントとして保護されているクラスタの各ノードで個別に

インストールする必要があります。クラスタ化されたアプリケーションをバックアップするときに、バックアップポリシーでクライアント名としてアプリケーションに関連付けられている仮想サーバー名を指定します。これにより、バックアップ操作中にクラスタの正しいノードが確実に選択されます。

SAN クライアントのエラーからの保護について

SAN メディアサーバーと同様に、SAN クライアントもネットワークを介してメディアサーバーにバックアップ通信を送信しません。ただし、ストレージデバイスにバックアップデータを直接送信する SAN メディアサーバーとは異なり、SAN クライアントは SAN 接続を介してリモートメディアサーバーにバックアップデータを送信します。

SAN クライアントは多くの場合クラスタ化されたアプリケーションを保護するために使われます。このように使われた場合に SAN クライアントのエラーから NetBackup を保護するには、SAN クライアントを EMM のアプリケーションクラスタとして構成してください。また、この構成によって、バックアップが開始されるときに、バックアップを制御するメディアサーバーがクラスタのアクティブノードへのファイバートランспорт接続を常に開くようになります。

サイトのエラーからの保護について

ローカルのクラスタ化は各サイトにローカルのフェールオーバーを提供します。ただし、これらの構成は地域全体の機能停止を引き起こす大洪水、台風、地震のような大規模な障害に対しての保護は提供しません。クラスタ全体がそのような停止によって影響を受ける可能性があります。そのような状況で、グローバルなクラスタ化か広域のクラスタ化は、かなり離れて位置するリモートクラスタにアプリケーションをマイグレートすることによってデータの可用性を確保します。

グローバルクラスタアーキテクチャは、遠く離れている2つ以上のデータセンター、クラスタ、サブネットの配備をサポートします。レプリケートされたマスターサーバークラスタを含んでいるグローバルクラスタは、各サイトでレプリケーションジョブとクラスタを監視し、管理できます。サイトの停止の場合には、レプリケーションロールのセカンダリサイトへのシフトを制御します。重要なアプリケーションを起動し、1つのクラスタから他にクライアントの通信をリダイレクトします。

自動イメージレプリケーションは NetBackup のドメインの間でレプリケートされるべき個々のディスクベースのバックアップを可能にする NetBackup 機能です。バックアップがターゲットのドメインの NetBackup カタログに自動的に記録されるので、自動イメージレプリケーションを使うとき、複合のカタログリカバリの手順のカタログレプリケーションの必要がありません。詳しくは次を参照してください。『NetBackup 管理者ガイド Vol. 1』。

高可用性環境でのカタログの保護について

NetBackup カタログは、既存のバックアップとバックアップポリシーの両方についての情報 (バックアップ対象、バックアップのタイミング、バックアップ先、バックアップの保持期間など) を含んでいます。したがって、カタログは単一障害点であり、保護する必要があります。RAID ストレージを使うと、ストレージのエラーに対して保護が提供されます。また、レプリケーションを使ってストレージのエラーとサイトの損失から保護することもできます。カタログの通常のバックアップでは破損と予想外のデータ損失から保護できます。

p.21 の [表 2-5](#) を参照してください。は NetBackup カatalogを保護するための各種の方式を説明しています。

表 2-5 高可用性環境での NetBackup カatalogの保護

保護方式	説明
カタログバックアップ	カタログバックアップはハードウェア障害とデータ破損の両方からマスターサーバーの NetBackup カatalogを保護するもので、カタログバックアップは定期的に (理想的には 1 日 1 回以上) 作成する必要があります。カタログバックアップでは、ポリシーに基づくバックアップが行われます。そのため、通常のバックアップポリシーと同様に柔軟にスケジュールを設定できます。ポリシーが増分バックアップを可能にするので、大きいカタログのカタログバックアップ時間をかなり減らすことができます。ただし、リストアの必要があるため、増分バックアップからのリカバリには時間がかかる可能性があります。 テープに書き込まれるカタログバックアップは、カタログバックアップボリュームプールのメディアのみを使います。 詳しくは次を参照してください。『NetBackup 管理者ガイド Vol. 1』。
カタログレプリケーション	カタログレプリケーションはカタログデータベースの複製バージョンを作成し、管理する処理です。カタログレプリケーションはデータベースをコピーし、1 つのレプリカに行われた変更が他のすべてに反映されるように一連のレプリカの同期化を行います。 カタログをディザスタリカバリサイトかセカンダリサイトのスタンバイマスターサーバーにレプリケートすると、ディザスタリカバリサイトでの迅速なカタログリカバリが実現します。継続的なレプリケーションによって、カタログはレプリケーションリンクで可能な最新の状態になります。 メモ: レプリケーションはカタログの破損、誤った削除、イメージの期限切れに対しては保護しません。通常のスケジュールカタログバックアップを行ってください。 p.37 の「NetBackup カatalogレプリケーションについて」を参照してください。 p.28 の「カタログリカバリについて」を参照してください。

クラスタへのメディアサーバーのインストールについて

クラスタ構成では、NetBackup マスターサーバーがメディアサーバーでもある場合に、クラスタの各ノードのフェールオーバー非対応アプリケーションとして NetBackup メディアサーバーと SAN メディアサーバーをインストールできます。このように構成すると、クラスタのすべてのノードが、同じクラスタで実行される他のアプリケーションに対してフェールオーバーするストレージユニットグループまたは仮想ストレージユニットとともにメディアサーバーとして機能できます。

クラスタ環境でない場合と同様に、各メディアサーバーを構成します。詳しくは、『NetBackup インストールガイド』を参照してください。

p.22 の「NetBackup クラスタの仮想ストレージユニットについて」を参照してください。

NetBackup クラスタの仮想ストレージユニットについて

一般的な NetBackup 環境では、ストレージユニットをマスターサーバーまたはメディアサーバーなどの NetBackup エンティティに関連付けます。ただし、この章で説明する構成では、ストレージユニットをクラスタ環境内のアプリケーションの仮想名に関連付けます。このアプリケーションのストレージユニットは、クラスタの特定のノードには関連付けられないため、クラスタのどのノードにもフェールオーバーできます。関連付けられないことで、ストレージユニットは、クラスタ内のアプリケーションを実行している場所に関係なく、確実にアプリケーションの動作に従います。NetBackup マスターサーバーは、クラスタ化されたアプリケーションのバックアップ時に、メディアサーバー名としてアプリケーションの仮想名を使用します。

この構成は、Veritas Cluster Server (VCS)、旧名 Microsoft Cluster Server (MSCS) の Windows Server Failover Cluster (WSFC)、SunCluster、Service Guard、HACMP でサポートされています。

仮想ストレージユニットを使用するクラスタで NetBackup メディアサーバーをアップグレードする場合の前提条件

仮想ストレージユニットを使用するクラスタで NetBackup スタンドアロンメディアサーバーを構成する場合は、次の要件を満たす必要があります。

- ハードウェアで、クラスタテクノロジーと NetBackup がサポートされている必要があります。NetBackup でサポートされているストレージデバイスのリストについては、次の Web サイトを参照してください。また、使用しているクラスタソフトウェアに付属のマニュアルも参照してください。
<http://entsupport.symantec.com>
- ストレージデバイスが正常にインストールおよび構成されて、クラスタ環境で動作していることを確認します。ストレージデバイスの構成方法については、『NetBackup インストールガイド』を参照してください。

- クラスタ化された各アプリケーションに仮想 IP アドレスおよび仮想ホスト名が関連付けられている必要があります。
- クラスタ (VCS、WSFC、SunCluster、Service Guard または HACMP) が正しくインストールされ、構成されていることを確認します。
- NetBackup マスターサーバーをロボット制御ホストに設定します。ただし、ロボット形式によってはロボット制御オプションがない場合があるため、すべての構成でロボット制御ホストを変更できるとはかぎません。
- NetBackup Enterprise Server 7.7 インストールプログラムおよび有効なライセンスキーを確認します。テープへのバックアップを実行する場合は、NetBackup Shared Storage Option の有効なライセンスキーも必要です。

クラスタへの NetBackup メディアソフトウェアのインストールについて

クラスタの各ノードに NetBackup メディアサーバーソフトウェアをインストールします。次を参照してください。『[NetBackup インストールガイド](#)』を参照してください。

メモ: この章での説明に従って NetBackup を構成する場合、NetBackup メディアサーバーをフェールオーバーアプリケーションとして構成しないでください。メディアサーバーはクラスタの各ノードのスタンドアロンアプリケーションとして使用する必要があります。

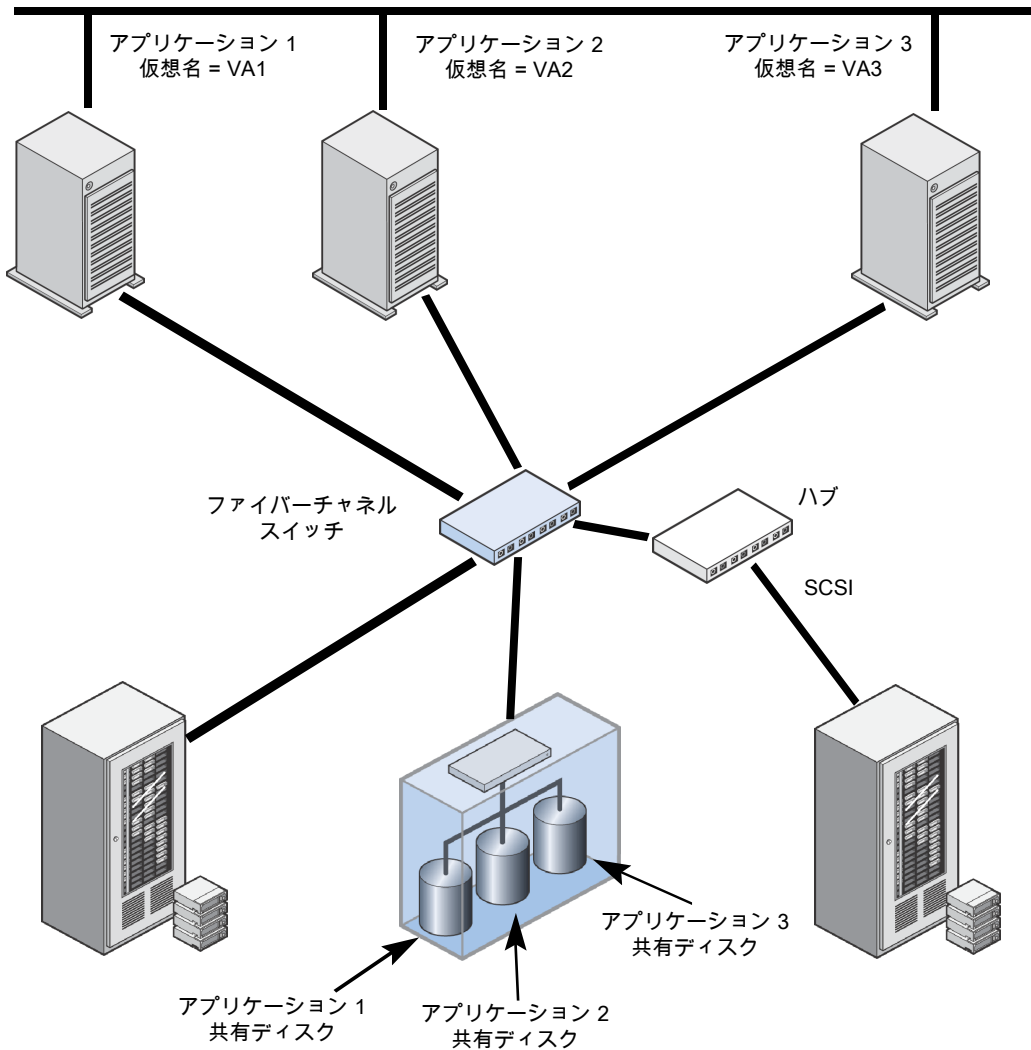
NetBackup クラスタの仮想ストレージユニットの構成について

ストレージがディスクベースであるか、テープベースであるかによって、ストレージユニットの構成は異なります。

 **2-2** に、ローカルメディアサーバーにインストールされた NetBackup を示します。

図 2-2

ローカルメディアサーバーにインストールされた NetBackup



テープストレージユニットの追加

次の手順はテープストレージユニットを追加する方法を示しています。

テープストレージユニットを追加する方法

- 1 クラスタのすべてのノードに、NetBackup メディアサーバーおよび Shared Storage Option がインストールされ構成されていることを確認します。

- 2 マスターサーバー上で、[サーバー (Servers)] リストを次のように変更します。

- クラスタの各ノードのホスト名を追加します。
- 各高可用性アプリケーションの仮想名を追加します。

UNIX または Linux 環境では、bp.conf ファイルを更新します。Windows では、サーバーのホストプロパティで [サーバー (Servers)] リストを編集します。

- 3 マスターサーバー上で、次のコマンドを実行して、アプリケーションの仮想名を持つホストを追加します。

```
nbbmmcmd -addhost -machinename <cluster_name> -machinetype
app_cluster
```

<virtual_name> はそのアプリケーションの仮想名です。

- 4 マスターサーバー上で、次のコマンドを実行して、アプリケーションを実行するクラスタ内の各ノードにホストを関連付けます。

```
nbbmmcmd -updatehost -add_server_to_app_cluster -machinename
<node_name> -machinetype media -clustername <virtual_name>
-netbackupversion 7.6 -masterserver <master_name>
```

<node_name> はアプリケーションを実行できるノードです。<virtual_name> はアプリケーションの仮想名です。<master_name> は NetBackup マスターサーバーの名前です。

- 5 アプリケーションを実行できる各ノードに対して、手順 4 を繰り返します。

- 6 メディアサーバーがインストールされている各ノードで、[サーバー (Servers)] リストを次のように変更します。

- クラスタの各ノードのホスト名を追加します。
- 各高可用性アプリケーションの仮想名を追加します。

- 7 NetBackup 管理コンソールを使用して、各アプリケーションのストレージユニットを作成します。ストレージユニットのメディアサーバー名としてアプリケーションの仮想名を指定します。

- 8 各アプリケーションをバックアップするには、そのアプリケーションに対して手順 7 で作成したストレージユニットを指定するポリシーを作成します。

この構成に特定のテープデバイスを割り当て、ストレージユニットジョブに負荷をかけないようにします。クラスタ内の各アプリケーションのストレージユニットを作成します。または、多数のアプリケーションによって使われるストレージユニットグループを作成します。

ディスクストレージユニットの追加

Veritas では、ディスクストレージユニットの追加に NetBackup 管理コンソールを使用することをお勧めします。(コマンドラインでも実行できます。)

ディスクストレージユニットを追加する方法

- 1 マスターサーバー上で、[サーバー (Servers)] リストを次のように変更します。

- クラスタの各ノードのホスト名を追加します。
- 各高可用性アプリケーションの仮想名を追加します。

UNIX または Linux 環境では、bp.conf ファイルを更新します。Windows では、サーバーのホストプロパティで [サーバー (Servers)] リストを編集します。

- 2 マスターサーバー上で、次のコマンドを実行して、アプリケーションの仮想名を持つホストを追加します。

```
nbenmmcmd -addhost -machinename <virtual_name> -machinetype  
app_cluster
```

<virtual_name> はそのアプリケーションの仮想名です。

- 3 マスターサーバー上で、次のコマンドを実行して、アプリケーションを実行するクラスタ内の各ノードにホストを関連付けます。

```
nbenmmcmd -updatehost -add_server_to_app_cluster -machinename  
<node_name> -machinetype media -clustername <virtual_name>  
-netbackupversion 7.6 -masterserver <master_name>
```

<node_name> はアプリケーションを実行できるノードです。

<virtual_name> はそのアプリケーションの仮想名です。

<master_name> は NetBackup マスターサーバーの名前です。

- 4 アプリケーションを実行できる各ノードに対して、手順 3 を繰り返します。
- 5 メディアサーバーがインストールされている各ノードで、[サーバー (Servers)] リストを次のように変更します。
 - クラスタの各ノードのホスト名を追加します。
 - 各高可用性アプリケーションの仮想名を追加します。
- 6 NetBackup 管理コンソールを使用して、各アプリケーションのディスクストレージユニットを作成します。ストレージユニットのメディアサーバー名としてアプリケーションの仮想名を指定します。
- 7 各アプリケーションをバックアップするには、そのアプリケーションに対して手順 6 で作成したストレージユニットを指定するポリシーを作成します。

仮想ストレージユニットを使用するクラスタでの NetBackup メディアサーバーのアップグレード

次の手順は、仮想ストレージユニットを使用するクラスタで NetBackup 以上のスタンドアロンメディアサーバーをアップグレードする方法を示しています。

仮想ストレージユニットを使用するクラスタで NetBackup メディアサーバーをアップグレードする方法

- 1 NetBackup メディアサーバーがインストールされている各ノードで、クラスタ環境でない場合と同じようにローカルディスクにソフトウェアをインストールします。

次の文書で説明されるアップグレード方法の手順に従います。『[NetBackup™ インストールガイド](#)』。

- 2 マスターサーバーで、次のコマンドを実行します。

```
nbemmcmd -updatehost -machinename <virtual_name> -machinetype  
app_cluster -netbackupversion 7.6
```

<virtual_name> はそのアプリケーションの仮想名です。

- 3 クラスタ環境の各仮想アプリケーションに対して手順 2 を繰り返します。

カタログバックアップとリカバリを使用したサイトディザスタリカバリについて

この章では以下の項目について説明しています。

- [カタログリカバリについて](#)
- [DRドメインのディスクリカバリについて](#)

カタログリカバリについて

サイトのディザスタリカバリの間に発生する重要な問題は、ディザスタリカバリ (DR) サイトが本番サイトのミラーイメージではないことです。DR 操作を実行するには、本番マスターサーバーからの **NetBackup** カタログのコピーを必要とします。**NetBackup** カタログのバックアップとリカバリ処理は、サイトの損失よりもむしろカタログストレージかマスターサーバーのエラーからのリカバリのために主に使用されます。デフォルトの状況では、**NetBackup** は EMM データベースを含む完全なカタログをリストアします。EMM データベースはメディアサーバー、バックアップデバイス、ストレージユニットの詳細を含んでいます。マスターサーバーはバックアップとリストアを指示するためにこの情報を使います。マスターサーバーはまたバックアップデバイスの状態を設定するためにメディアサーバーに問い合わせる場合にこの情報を使います。これらのメディアサーバーを含んでいない DR 環境では、マスターサーバーのパフォーマンスに影響が及ぶ可能性があります。また、ポーリング操作が接続に失敗し、タイムアウトになるため、リストア操作を実行する機能に影響が及ぶ可能性もあります。

メディアサーバーとクライアントの配置が主要本番サイトと異なる DR サイトで **NetBackup** 環境をリカバリするには、次の方法を使ってください。両方の方法に利点と欠点があります。

- 完全カタログリカバリの方法では、カタログ全体がリカバリされます。その後、不要な構成要素を削除するか、または無効にできます。
 p.29 の「[完全カタログリカバリについて](#)」を参照してください。
- 部分的なカタログリカバリでは、EMM データベースと BMR データベースはリストアされません。
 p.32 の「[部分的なカタログリカバリについて](#)」を参照してください。

リカバリの最も適切な方法は DR 機能の性質と本番機能との類似程度によって判断できます。

ディザスタリカバリ計画を作成する場合は、次のセクションで説明する方法に沿っていることを確認してください。

- p.44 の「[クロスドメインレプリケーションのディザスタリカバリドメインの計画](#)」を参照してください。
- p.30 の「[完全カタログリストアの実行](#)」を参照してください。
- p.33 の「[部分的なカタログリストアの実行](#)」を参照してください。

完全カタログリカバリについて

完全カタログリカバリは、本番サイトでデータの破損またはストレージの損失が発生した場合にカタログをリカバリするために主に使われます。完全カタログリカバリは単一ドメイン構成に推奨されます。完全カタログリカバリは本番サイトで使われる名前と同じ名前のメディアサーバーが DR サイトに同じ数ある場合に使われます。

完全カタログリカバリには部分的なカタログリカバリと比較して次の利点があります。

- ストレージユニット定義、メディアの割り当て、履歴を含んでいるリレーショナルデータベースのコンポーネントをリストアします。
- メディアプールと他の割り当て情報を含むプライマリサイトからのテープ情報を保有します。
- BMR データをリストアします。
- 本番サイトで使われるのと同じポリシーとテープを使って DR サイトでのバックアップの実行を可能にします。

完全カタログリカバリには、次の制限事項があります。

- リレーショナルデータベースのコンポーネントをリカバリすると、リカバリ前に DR サイトで設定されたデバイス構成とサーバー構成が失われます。リカバリ後に再度設定してください。リレーショナルデータベースに存在する、本番サーバーとデバイスについての情報は DR サイトに存在しないことがあります。DR 環境で円滑に操作を行うには、これらのサーバーエントリを無効にし、それらと関連付けられているデバイスを削除する必要があります。

- 完全カタログリカバリはリレーショナルデータベースのデバイス構成とサーバー構成を上書きします。カタログがリストアされた後、DR のドメインサーバーとデバイスの構成を再検出してください。

完全カタログリストアの実行

完全カタログリカバリでは、カタログバックアップ全体が DR マスターサーバーにリカバリされます。DR 環境に存在しないメディアサーバーは不必要なプールを避けるために無効にされます。DR サイトのデバイス構成が本番サイトと異なる可能性があるため、すべてのデバイスレコードが削除されます。EMM データベースを更新するためにデバイスの検出が実行されます。リストアを開始する前に次の手順を実行してください。また、DR 計画の手順を文書化してください。

完全カタログリストアを準備する方法

- 1 UNIX と Linux マスターサーバーで、bp.conf と vm.conf ファイルのコピーを作成します。
- 2 カタログ全体をリカバリする bprecover コマンドを実行します。

メモ: DR マスターサーバーには本番マスターサーバーと同じ名前とトポロジーがなければなりません。本番マスターサーバーがクラスタの場合は、DR マスターサーバーもクラスタである必要があります。メンバーノードの数とノードの名前は異なる可能性があります。

メモ: 別のメディアサーバーで作成されたカタログバックアップが使われる場合は、同じ名前のメディアサーバーがカタログリカバリに必要になります。

- 3 バックアップが自動的に開始されないようにすべてのバックアップポリシーを無効にします。
 - NetBackup 管理コンソールを使ってこれを手動でできます
 - または bppllist<policy> -set -inactive CLI を実行します。
- 4 NetBackup を停止します。
- 5 UNIX と Linux のマスターサーバーで、カタログバックアップからリストアされた bp.conf と vm.conf ファイルを手順 1 で作成したコピーと置き換えます。
- 6 新しいマスターサーバーで NetBackup Relational Database Manager、NetBackup PBX、EMM サービスを起動します。
 - UNIX と Linux マスターサーバーで、次のコマンドを実行します。
 - /usr/opensv/netbackup/bin/nbdbms_start_stop start

- `start /opt/VRTSpx/bin/pbx_exchange`
- `/usr/opensv/netbackup/bin/nbemmm`

メモ: NetBackup バージョン 6.5.3 以上の場合は、`nbemm -maintenance` コマンドを実行します。

- Windows マスターサーバーで、次の Windows サービスを起動します。
 - NetBackup Relational Database Manager
 - Private Branch Exchange
 - NetBackup Enterprise Media Manager

メモ: NetBackup コマンドは PBX の停止と起動を行わないため、PBX 処理はすでに動作していることがあります。

NetBackup Relational Database Manager サービスについて詳しくは、次を参照してください。『[NetBackup™ トラブルシューティングガイド](#)』。

- 7** DR 環境の一部ではないメディアサーバーを無効にします。次のコマンドを実行します。

```
nbemmmcmd -updatehost -machinename <Media Server> -machinestateop
set_admin_pause -machinetype media -masterserver <Master Server>
```

- 8** EMM データベースからすべてのテープデバイスを削除します。次のコマンドを実行します。

```
nbemmmcmd -deletealldevices -allrecords
```

- 9** NetBackup を再起動します。
- 10** デバイスの構成ウィザードを使って、新しいテープドライブとライブラリの構成を作成します。
- 11** バーコードマスキング規則が手順 6 で使われた場合は、同じ規則がここに設定されていることを確認します。必要に応じて、それらを追加します。
- 12** NetBackup 管理コンソールを使ってすべてのリカバリメディアが非ロボットに設定されているかどうかを確認します。
- 13**
 - 非ロボットに設定される必要のあるリカバリメディアがまだある場合、次の操作を実行します。
 - ロボットメディアを選択し、右クリックして[移動 (Move)]を選択します。
 - [ロボット (robot)]フィールドを[スタンドアロン (Standalone)]に変更します。

- [OK]をクリックして、変更を保存します。

- 14 すべてのリカバリメディアが非ロボットに設定されたら、[すべてのテープライブラリのインベントリの実行 (Inventory all the tape libraries)]フィールドでメディアが正しいライブラリで識別されていることを確認します。

これで本番データセンターにバックアップされているクライアントデータのリストア操作とリカバリ操作を開始できます。

完全カタログリストア後の DR 環境の一貫性の保持

本番サイトで重要なインシデントが発生した場合は、基本的なリカバリが完了した後しばらくしてから DR サイトから操作してください。DR 環境が操作可能になったら、DR 環境の一貫性を保持するために次の追加のタスクを必要に応じて実行できます。

DR 環境の一貫性を保持する方法

- 1 DR サイトで利用可能なストレージユニットを使うように、カタログバックアップポリシーを含むバックアップポリシーを修正し、有効にします。
- 2 不要になったバックアップポリシーを削除します。
- 3 メディアサーバーに関連付けられており、DR 環境の一部ではないストレージユニットを削除します。
- 4 削除したストレージユニットを使うストレージライフサイクルポリシーを修正します。

部分的なカタログリカバリについて

部分的なカタログリカバリは複数ドメイン構成に推奨されます。部分的なカタログリカバリは、少数のメディアサーバー、様々なライブラリ形式などを含む本番サイトとは異なるサーバーレイアウトの DR サイトに使われます。部分的なカタログリカバリは、インポートなしのリカバリ方式の 1 つです。同じ多数の制約の影響を受けます。詳しくは、次のリンクを参照してください。

部分的なカタログリカバリは、フラットファイルコンポーネントのみをリカバリし、リレーショナルデータベースはリカバリしません。従って、DR サイトの既存のインフラストラクチャ (サーバー、デバイス等) の詳細はリカバリ処理の間に失われません。また、バックアップと関連付けられているメディアサーバー情報がリカバリされないことも意味します。メディアサーバーは、データベースに手動で加えられなければならないはず割り当てられていません。誤って上書きされることがないプールにメディアサーバーが配置されていることを確認してください。

部分的なカタログリカバリには完全カタログリカバリと比較して次の利点があります。

- 構成の要素を削除または再検出する必要がありません。リカバリ処理は DR 環境の一般的な構成には影響しません。

- サーバートポロジーには影響しません。DR サイトのマスターサーバートポロジーは本番サイトのトポロジーを反映する必要はありません。従って、クラスタ化されたマスターサーバーからのカタログバックアップを DR サイトのスタンドアロンマスターサーバーにリストアできます。
- 2つの環境で使われるクライアント名、バックアップポリシー名、テープラベルの範囲が一意の場合、DR サイトは本番サイトにできます。また、別の本番バックアップドメインに部分的なリカバリを実行することも可能です。

部分的なカタログリカバリでは、DR サイトでプライマリサイトからのテープ情報をリカバリできません。テープが誤って上書きされていないことを確認してください。これらのテープは DR サイトでのバックアップのために簡単に使われてはなりません。

部分的なカタログリストアの実行

部分的なカタログの方法では、テープを特定のメディアプールに割り当て済みにすることや配置することはリストア操作に必要ないと想定しています。テープが EMM に存在し、NetBackup がリストアのためにテープをマウントし、読み込むことができることも想定されています。次の手順はリストアを開始する前に実行する必要があります。

部分的なカタログリストアを準備する方法

- 1 UNIX と Linux のマスターサーバーで、bp.conf と vm.conf ファイルのコピーを作成します。
- 2 NetBackup のカタログイメージと構成ファイルのみをリカバリします。
 - NetBackup 管理コンソールを使用した場合は、メッセージが表示されたら[部分的カタログリカバリ (Partial catalog recovery)]オプションを選択します。
 - または bprecover -wizard コマンドを実行します。

メモ: DR マスターサーバーの名前は本番マスターサーバーの名前と同じでなければなりません。

メモ: 別のメディアサーバーで作成されたカタログバックアップが使われる場合は、同じ名前のメディアサーバーがカタログリカバリに必要になります。

- 3 レプリケートされたリレーショナルデータベースバックアップからメタデータをエクスポートするには、cat_export -all -staging を実行します。

- 4 アクティブなリレーショナルデータベースに、エクスポートされたメタデータをインポートするには、コマンド `cat_import -all` を実行します。または、マスターサーバープラットフォームに応じて `bp.conf` ファイルまたはレジストリでパラメータ `LIST_FS_IMAGE_HEADERS` を `YES` に設定します。これにより、次のカタログのクリーンアップジョブで、エクスポートされたメタデータが自動的にインポートされます。
- 5 バックアップが自動的に開始されないようにすべてのバックアップポリシーを無効にします。
 - NetBackup 管理コンソールを使ってこれを手動でできます。
 - または `bppllist<policy> -set -inactive CLI` を実行します。
- 6 NetBackup を停止します。
- 7 UNIX と Linux のマスターサーバーで、カタログバックアップからリストアされた `bp.conf` と `vm.conf` ファイルを手順 1 で作成したコピーと置き換えます。
- 8 NetBackup を起動します。
- 9 テープが非スクラッチメディアプールに確実に追加されるようにすべてのテープライブラリをインベントリ処理します。このプールは有効なバックアップポリシーによってテープが後で誤って上書きされることを防ぎます。

これで本番データセンターにバックアップされているクライアントデータのリストア操作とリカバリ操作を開始できます。

部分的なカタログリストア後の DR 環境の一貫性の保持

本番サイトで重要なインシデントが発生した場合は、基本的なリカバリが完了した後しばらくしてから DR サイトから操作してください。DR 環境が操作可能になったら、DR 環境の一貫性を保持するために次の追加のタスクを必要に応じて実行できます。

DR 環境の一貫性を保持する方法

- 1 バックアップポリシーと、DR サイトで必要なカタログバックアップポリシーを修正し、有効にします。
- 2 もはや必要でないポリシーを削除します。

DR ドメインのディスクリカバリについて

OpenStorage と他の AdvancedDisk 形式の導入によって、重複排除ディスクはバックアップストレージメディアとしてテープストレージより優先されます。ディスクストレージを使って、セカンダリの場所の別のディスクデバイスにディスクデバイスの内容をレプリケートできます。このレプリケーションによってディザスタリカバリサイトに物理的なバックアップメディアをトランスポートする必要がなくなります。

単一ドメインレプリケーションの DR 環境でのディスクリカバリ

NetBackup の同じドメイン内のバックアップを複製するとき、重複を排除するディスクのレプリケーションを最適化するためにストレージライフサイクルポリシーを使うことができます。これは本番サイトと同じマスターサーバーによって制御されるディザスタリカバリサイトでバックアップイメージの複製コピーを作成する効率的な方法です。ただし、最適化された重複排除は単一ドメインレプリケーションでのみ有効です。

自動イメージレプリケーション

自動イメージレプリケーションでは、別のドメインにバックアップを複製するという概念が拡張されており、DRドメインに個々のバックアップコピーを送信できます。自動イメージレプリケーションを使って作成されたバックアップコピーは DRドメインで自動的にカタログ化されるため、DRドメイン内で追加のリカバリ手順を実行する必要はありません。これらのステップを手動で実行する方法について詳しくは、次を参照してください。『[NetBackup 管理者ガイド Vol. 1](#)』自動イメージレプリケーションについて詳しくは、

クロスドメインレプリケーションの DR 環境でのディスクリカバリ

使われるディスク技術が自動イメージレプリケーションをサポートしない場合の代替手法としては、単にストレージ全体をレプリケートしてから、カタログリカバリと nbcatsync ユーティリティの組み合わせを使ってディザスタリカバリの場所でカタログを入力します。クロスドメインレプリケーションには nbcatsync ユーティリティを使うことができます。nbcatsync ユーティリティを使って、レプリケートされたディスクストレージの内容全体をインポートせずに本番ドメインとディザスタリカバリドメイン間でディスクストレージをレプリケートできます。

nbcatsync ユーティリティは EMM データベースとイメージデータベースのメタデータコンポーネントに記録されたディスクメディア ID が異なってもレプリケーションを実行しやすくします。nbcatsync ユーティリティはディザスタリカバリドメインの EMM データベースのメディア ID とイメージデータベースのメタデータのディスクメディア ID を合わせます。本番サイトで行われる通常のバックアップとカタログバックアップはレプリケートするディスクストレージに書き込まれます。カタログバックアップのディザスタリカバリファイルはディザスタリカバリドメインに送信されます。

nbcatsync ユーティリティはすべてのマスターサーバープラットフォームでサポートされています。NetBackup によってサポートされるすべての Advanced Disk 形式で使うことができます。

障害が発生した場合にクロスドメインレプリケーション環境でディスクをリカバリするには、DRドメインのマスターサーバーで次の手順を実行します。

- 1 DRドメインの EMM データベースのディスクメディア ID 情報とカタログバックアップの DR ファイルのディスクメディア ID 情報を合わせます。そのために、次のコマンドを実行します。

```
nbcatsync -sync_dr_file <DR file name>
```

- 2 次のコマンドを実行して、レプリケートされたカタログバックアップから部分的なカタログリカバリを実行します。

```
bprecover -wizard
```

- 3 レプリケートされたリレーショナルデータベースバックアップからメタデータをエクスポートするには、コマンド `cat_export -all -staging` を実行します。
- 4 アクティブなリレーショナルデータベースに、エクスポートされたメタデータをインポートするには、コマンド `cat_import -all` を実行します。
- 5 部分的なカタログリカバリによってリカバリされたイメージレコードと関連付けられているディスクメディア ID を DRドメインに存在するディスクメディア ID と合わせます。そのために、次のコマンドを実行します。

```
nbcatsync -backupid <restored catalog backup ID>
```

自動イメージとカタログレプリケーションによるサイトの損失保護について

この章では以下の項目について説明しています。

- [自動イメージレプリケーション \(AIR\)](#) について
- [NetBackup カatalogレプリケーション](#)について

自動イメージレプリケーション (AIR) について

自動イメージレプリケーション機能は NetBackup ドメイン間でのバックアップの複製を可能にし、バックアップの複製時にターゲットドメインにカタログエントリを自動的に作成します。ペリタスは、ディザスタリカバリサイトで NetBackup カatalogを入力する手段としてライブカタログレプリケーションではなく自動イメージレプリケーションを使うことを推奨します。自動イメージレプリケーションについて詳しくは、『[NetBackup 管理者ガイド](#)』の関連したセクションを参照してください。このマニュアルでは、ネットワーク環境が自動イメージレプリケーションの使用に適さない場合にカタログデータをレプリケートするための代替手法について説明しています。

NetBackup カatalogレプリケーションについて

NetBackup のデータ保護戦略を決定するには、DR サイトを同じ NetBackup ドメインの一部にするか、または別の NetBackup ドメインにするかを決定する必要があります。

NetBackup は次のようなカタログレプリケーションを使って構成できます。

- 複数サイト単一ドメインレプリケーション
p.40 の「[複数サイト単一ドメインレプリケーションについて](#)」を参照してください。

- 複数サイトクロスドメインレプリケーション
p.43 の「[複数サイトクロスドメインレプリケーションについて](#)」を参照してください。

レプリケートされた NetBackup カatalogのサポートの条件について

レプリケーション用に準備された NetBackup 環境であれば、他の NetBackup サーバーと同様にサポートされます。レプリケートされたカatalogボリュームが失敗し、適度な時間内で回復不能な場合、NetBackup サポートの推奨事項は、レプリケートされないカatalogの回復不能なディスクエラーの場合の推奨事項と同じです。プライマリマスターサーバー上の最新の利用可能なカatalogバックアップからカatalogをリストアする必要があります。

メモ: データはいずれのデータレプリケーションソリューションでも失われる場合があります。NetBackup カatalogを保護するには、レプリケーションテクノロジーに失敗リスクがあるため、レプリケーションテクノロジーのみに頼ってはなりません。NetBackup プライマリサーバーのデータが、ホットスタンバイ状態の NetBackup セカンダリサーバーへ複製したことが原因で壊れることがあります。したがって、頻繁に NetBackup サーバーカatalogをバックアップしてください。

警告: レプリケーションはアプリケーションパフォーマンスに悪影響を及ぼすことがあります。NetBackup カatalogへの変更をコミットする追加の時間が必要になるので、全体的なバックアップ時間に影響することがあります。自己の責任においてレプリケーションを使用してください。ベリタスには、正しくレプリケーションソリューションをインストールし、構成し、監視しなかった場合の、いかなるレプリケーションエラーについても責任はありません。

NetBackup カatalogのレプリケーションのサポート条件は次の通りです。

- 使用されるレプリケーションテクノロジーは、一貫性があり、書き込み順になっているデータのコピーを常に保持する必要があります。
- 非同期レプリケーションテクノロジーの使用は、書き込み順序の忠実性が維持できれば、許可されます。
- 時間ごとのスナップショットなど、スケジュールされたレプリケーションテクノロジーの使用はサポートされません。
- NetBackup マスターサーバーは、単一のエンティティとして制御される仮想サーバーと同じ仮想サーバー上に設置する必要があります。
- プライマリマスターサーバーとセカンダリマスターサーバーは類似の形式、仕様、オペレーティングシステムであり、同じ仮想ホスト名を使用する必要があります。
- セカンダリマスターサーバーは、プライマリマスターサーバーと同じドメインにあっても別のドメインにあっても、NetBackup の他のどの機能も持つてはなりません。たとえ

ば、マスターサーバーとして使わない場合に、メディアサーバーとしてセカンダリマスターサーバーを使うことはできません。また、**NetBackup** の別のドメインのマスターサーバーとして使うこともできません。カタログはレプリケートされますが、結合できません。

- サーバーの物理ホスト名と IP アドレスとは別の **NetBackup** マスターサーバーの仮想ホスト名と IP アドレスを使うには、クラスタ環境と非クラスタ環境の両方を構成してください。別の仮想ホスト名と IP アドレスは、DNS ルーティングによってアクティブマスターサーバーノードを制御することを可能にします。また、それはプライマリマスターサーバーとセカンダリマスターサーバーがドメインで同時にアクティブになることを防ぎます。クラスタ環境の場合、この要件はクラスタ構成によって自動的に満たされます。非クラスタ環境の場合、仮想ホスト名をインストール中に指定する必要があります。
- プライマリマスターサーバーとセカンダリマスターサーバーが同じバージョンの **NetBackup** とそのコンポーネントを使用していることを確認してください。オペレーティングシステム、**NetBackup** のバイナリ、EEB、そしてこれらのパス以外に存在するファイルが複製対象に指定されていることを確認してください。
- クラスタ化されたマスターサーバーとクラスタ化されていないマスターサーバー間のレプリケーションは可能ではありません。サーバーのペアはクラスタ化されるか、またはクラスタ化されないかのいずれかである必要があります。
- **NetBackup** カatalogのマウントポイントはプライマリサイトとセカンダリサイトの両方で同じである必要があります。
- カatalogデータのみがサーバー間でレプリケートされ、レプリケーション用の単一のボリュームかボリュームセットの同じ場所にすべて配置される必要があります。クラスタ化されたマスターサーバーの場合、クラスタの共通ボリュームがレプリケートされます。クラスタ化されていないマスターサーバーの場合、レプリケーション用にボリュームセットにリンクする必要があるパスについて詳しくは、次を参照してください。
p.52 の「カタログレプリケーションを使用するクラスタ化されていない NetBackup マスターサーバーについて」を参照してください。
- 仮想名か DNS エイリアスがプライマリホストとセカンダリホスト両方に同時に解決されないことを確認してください。
- カatalogレプリケーションはカタログバックアップの要件を排除しません。イメージの不慮の期限切れ、またはプライマリサイトのカタログに発生し、セカンダリサイトにレプリケートされる他の不整合から保護するために、プライマリマスターサーバーから **NetBackup** カatalogを定期的にバックアップしてください。
- カatalogが (プライマリドメインのメディアサーバーにアクセスできるセカンダリサーバーへよりもむしろ) **NetBackup** ドメイン間でレプリケートされる場合、テープに書き込まれるバックアップとレプリケート済み **BasicDisk** ストレージのみがディザスタリカバリのドメインにリストアできます。
- セカンダリマスターサーバーへのカタログのレプリケーションは、プライマリマスターサーバーの短期間の停止の間にデータをリストアすることを可能にします。クロスドメ

インのレプリケーション構成では、フェールオーバー後にバックアップを実行できることを確認してください。カタログはデータを損失することなく、後日フェールオーバーでプライマリサーバーに戻せる必要があります。延長された停止時間に DR サイトでバックアップを作成し、DR サイトで作成されるバックアップについての情報を失うことなくプライマリサイトに戻ることを計画する場合は、このサポート条件を考慮してください。

- **NetBackup** がセカンダリサイトのレプリケートされたコピーを使用している場合は確認してください。このような使用はサポートの要件ではありません。
- カatalogとバックアップイメージは両方セカンダリサイトでアクセス可能である必要があります。
ユーザーは、バックアップイメージの有効なコピーの可用性に関連する手順に対処する必要があります。また、ユーザーはセカンダリサイトでイメージからリストアするように **NetBackup** サーバーを有効にするための手順を定義する必要があります。この文書ではこれらの手順に対処しません。
- ユーザーはデータレプリケーションソリューションのインストール、構成、監視を行います。ユーザーは、一貫性があり、書き込み順になっている **NetBackup** カatalogボリュームのコピーをレプリケーションテクノロジーが継続的に保持していることを確認する必要があります。

カatalogの同期について

レプリケーションは、サイト間のテープの移動と比較すると、ほぼ瞬時の処理です。DRドメインで示されるレプリケーションカatalogデータは、先に本番ドメインから振り分けられ DRドメインで利用可能な在庫テープよりも新しい場合があります。リストア操作中は、テープがリストア用に本番ドメインから振り分けられる前に作成されるバックアップのみを選択してください。

複数サイト単一ドメインレプリケーションについて

複数サイト単一ドメインは両方のサイトのクライアントサーバーとメディアサーバーが共通のマスターサーバーの制御の下にある場合に使われます。どちらのサーバーも同じドメインの一部を成すため、同じメディアサーバーとクライアントを認識し、よって **NetBackup** カatalogはセカンダリマスターサーバーで全面的に有効となります。

複数サイト単一ドメインモデルでは、**NetBackup** カatalogはサイト間でレプリケートされます。プライマリサイトで問題が発生した場合に、マスターサーバーはセカンダリサイトのスタンバイノードにフェールオーバーされます。バックアップは両方のサイトに (構成に応じてインラインコピーか複製のいずれかによって) 作成されます。従って、単一サイトの損失は本当の災害ではなく、いくつかのアプリケーションサーバーの損失を意味します。バックアップドメインが両方のサイトにまたがるため、単一サイトの損失の結果、バックアップ環境が破壊されるのではなく、バックアップおよびリストア機能が減少します。複数サイト単一ドメインモデルはマスターサーバーのクラスタ化とストレージのレプリケーションを組み

合わせて使います。この組み合わせによりマスターサーバーをセカンダリの場所に簡単にすばやく再配置できます。

複数サイト単一ドメインモデルは次の方法で構成できます。

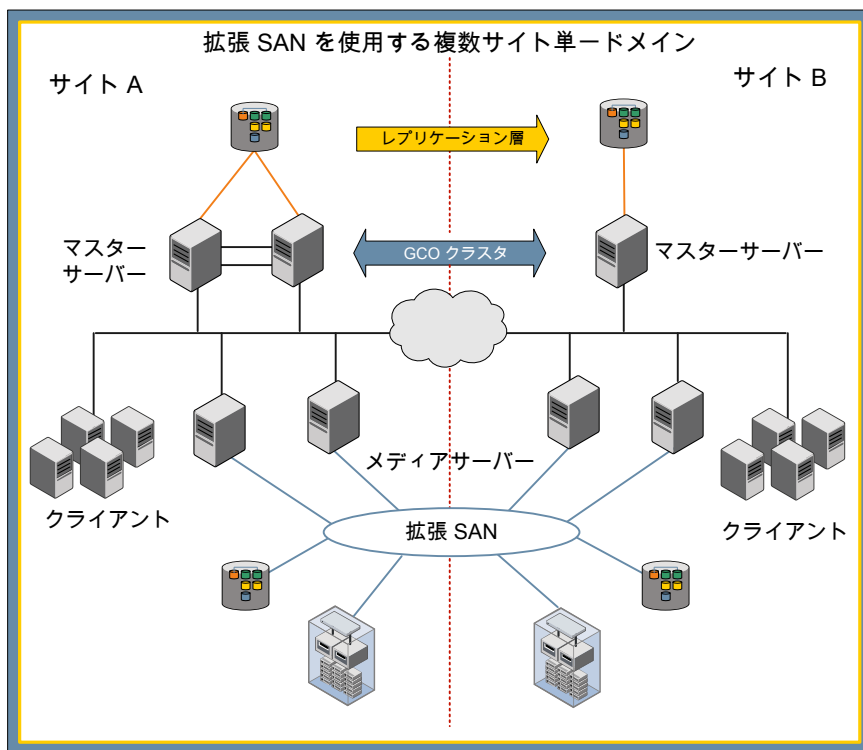
- 拡張 SAN を使用する複数サイト単一ドメイン
p.41 の「[拡張 SAN を使用する複数サイト単一ドメインについて](#)」を参照してください。
- 最適化複製を使用する複数サイト単一ドメイン
p.42 の「[最適化複製を使用する複数サイト単一ドメインについて](#)」を参照してください。

拡張 SAN を使用する複数サイト単一ドメインについて

拡張 SAN を使用する複数サイト単一ドメインを構成するには、各サイトのメディアサーバーが両方のサイトのバックアップデバイスに SAN アクセスするように構成する必要があります。このアクセスにより、メディアサーバーはサイト間でバックアップを書き込み、複製できます。この構成は、サイト間が 50 マイルまでの間隔ではよく機能しますが、間隔と遅延が増加するにつれて効果は低下します。

 **図 4-1** に、レプリケートされたグローバルクラスタが拡張 SAN を使用する複数サイト単一ドメインでどのように構成されるかを示します。

図 4-1 拡張 SAN を使用する複数サイト単一ドメイン

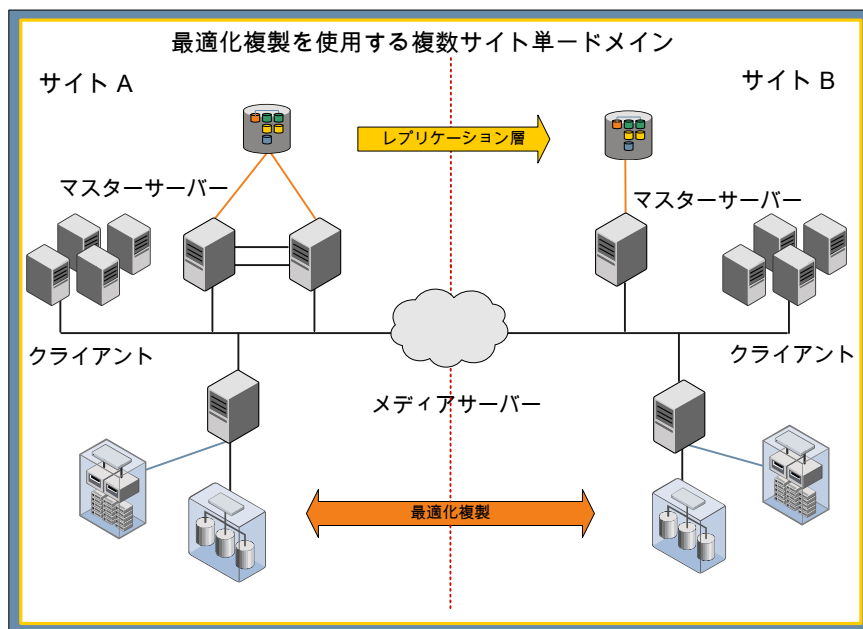


最適化複製を使用する複数サイト単一ドメインについて

最適化複製を使用する複数サイト単一ドメインを構成するには、拡張 SAN を、最適化複製を実行する OpenStorage デバイス間の接続に置き換える必要があります。この構成では、より小さいデータボリュームがサイト間で交換されるので地理的な距離を大きくすることができます。ストレージライフサイクルポリシーの階層的な複製機能を使って、1 つのサイトで OpenStorage デバイスのバックアップを作成することが可能です。それからそれらを他のサイトの OpenStorage デバイスに複製し、最終的に複製コピーを長期保存用テープに複製します。

図 4-2 に、レプリケートされたグローバルクラスタが最適化複製を使用する複数サイト単一ドメインでどのように構成されるかを示します。

図 4-2 最適化複製を使用する複数サイト単一ドメイン



複数サイトクロスドメインレプリケーションについて

複数サイトでドメインを超えての複製は、DR サイトが本番ドメインとは別の NetBackup ドメインである場合に使われます。DR サイトには様々なメディアサーバーとデバイスがあります。

複数サイトクロスドメインレプリケーションはテープと BasicDisk ストレージ用のみサポートされます。AdvancedDisk 形式には特定のメディアサーバーまたはデバイスの構成要件があり、これらの構成要件では、ディザスタリカバリドメインで AdvancedDisk 形式にアクセスできません。

複数サイトクロスドメインと BasicDisk ストレージについて

ドメイン間のステージングされていない BasicDisk ストレージで保存されるイメージをレプリケートできます。レプリケーション先は DR ドメインのメディアサーバーの同じマウントポイントに対してマウントする必要があります。また、正しいメディアサーバーが選択されていることを確認するために `FAILOVER_RESTORE_MEDIA_SERVER` パラメータを設定してください。たとえば、本番ドメインのメディアサーバー `prdmed1` のマウントポイント `/BD1` を使って BasicDisk ストレージユニットを DR ドメインにレプリケートできます。DR マスターサーバーの `bp.conf` ファイルが `FAILOVER_RESTORE_MEDIA_SERVER = prdmed1 drmed1` を設定するように編集される場合、`/BD1` はメディアサーバー `drmed1`

でマウントできます。ステージングストレージユニットとして機能せず、ステージングストレージユニットまたは他のディスク形式でサポートされない **BasicDisk** ストレージユニットの場合にのみこの設定が可能です。

クロスドメインレプリケーションのディザスタリカバリドメインの計画

DR ドメインのセカンダリマスターサーバーでカタログのレプリケーションデータを使うには、マスターサーバー、メディアサーバー、ネットワーク接続、**NetBackup** ソフトウェアが機能していることを確認します。

ベリタスは、特に DR ドメインが通常どおり構成されていない場合に DR 構成手順を文書化することを推奨します。このマニュアルは、ドメインが専門の DR サービス会社が提供する施設である場合に非常に重要です。次のディザスタリカバリ計画の準備手順を参照してください。

クロスドメインレプリケーションのディザスタリカバリドメインの計画

- 1 本番ドメインで使用する DR ドメインのマスターサーバー、メディアサーバー、クライアントに **NetBackup** の同じバージョンをインストールします。

メモ: 本番ドメインに古いバージョンの **NetBackup** があるメディアサーバーが存在する場合、DR ドメインのメディアサーバーに古いバージョンをインストールしないでください。DR ドメインのマスターサーバーとメディアサーバーには同じバージョンを使ってください。

完全カタログレプリケーション方式が使われ、本番ドメインのマスターサーバーがクラスタ化されている場合、クラスタ化されたマスターサーバーも DR ドメインに存在する必要があります。クラスタのメンバーノードは、本番ドメインのノードと同じである必要はありません。部分的なカタログレプリケーション方式が使われる場合、DR ドメインのクラスタ化されたマスターサーバーは必要になりません。

- 2 テストバックアップポリシーを使って、クライアントとサーバー間のネットワークの接続と認証をテストします。テストの後でポリシーを無効にします。
- 3 テープドライブとライブラリはメディアサーバーに接続する必要があります。DR ドメインで使われるテープドライブは本番ドメインからのテープと読み込み互換性がある必要があります。これらは **NetBackup** の同じメディア形式として構成する必要があります。
- 4 DR ドメインのメディアサーバーを使ってバックアップをリストアできるように本番ドメインのメディアサーバーへのバックアップの書き込みを許可するために **FAILOVER_RESTORE_MEDIA_SERVER** パラメータを設定します。
- 5 部分的なレプリケーション方式が使われる場合、いずれのバックアップポリシーによっても使われない非スクラッチメディアプールを作成します。バックアップテープが確実にそのプールに自動的に追加されるようにバーコード規則を構成します。

- 6 DRドメインと本番ドメインで異なるライブラリ形式が使われる場合、バーコードマスキングが同じように機能することを確認します。必要な場合は終了文字を削除します。この操作を管理する規則を構成できます。
- 7 次の項目について確認します。
 - 元のバックアップテープを DR 用に使う場合、DR ドメインのテープライブラリにロードする必要があります。
 - バックアップが DR 用にセカンダリテープに複製される場合、テープライブラリにオフサイトテープをロードします。また、適切なコピー番号を含む `ALT_RESTORE_COPY_NUMBER` ファイルが作成されます。

メモ: ベリタスは、テープが DR ドメインのライブラリに配置される前に物理的に書き込みをロックすることを推奨します。このロックは有効なバックアップを誤って上書きするリスクを減らします。

完全カタログレプリケーションについて

完全カタログレプリケーションでは、カタログのすべての部分がセカンダリマスターサーバーにレプリケートされます。完全カタログレプリケーションでは、本番ドメイン、メディアプール、その他の割り当てからのテープ情報は保有されます。バックアップは、本番ドメインで使われるのと同じテープとポリシーを使って DR ドメインで実行できます。レプリケーションは逆方向に行うことができます。それにより、本番ドメインに戻す移行が単純化されます。ただし、リレーショナルデータベースのコンポーネントをレプリケートすることは本番ドメインのデバイス構成とサーバー設定が DR ドメインにレプリケートされることを意味します。この構成情報は使うことができません。また、DR ドメインの構成はリカバリの後で検出する必要があります。

完全カタログレプリケーションはクロスドメインレプリケーションには推奨ではありません。

完全カタログレプリケーションを使ったカタログのリカバリ

完全カタログレプリケーションでは、完全なカタログバックアップが DR マスターサーバーにリカバリされます。DR 環境に存在しないメディアサーバーは不要なプールを避けるために無効にする必要があります。DR サイトのデバイス構成が本番サイトと異なる可能性があるため、すべてのデバイスレコードが削除されます。さらに、EMM データベースを更新するためにデバイスの検出が実行されます。

このアプローチは、NetBackup が DR ドメインのセカンダリのマスターサーバーとメディアサーバーにインストールされているが、実行されていないことを想定しています。また、セカンダリのマスターサーバーとメディアサーバーは互いに通信するように構成されます。

リストアを開始する前に、完全カタログリストアを準備するために次の手順を実行します。
DR 計画としてこの手順を文書化してください。

- 1 プライマリサイトとセカンダリサイト間のレプリケーションが停止していることを確認します。
レプリケーションは、プライマリマスターサーバーが利用不能であるか、またはレプリケーションリンクが無効になれば停止します。
- 2 レプリケートされたボリュームをセカンダリマスターサーバーの適切なマウントポイントにマウントします。
- 3 新しいマスターサーバーで NetBackup Relational Database Manager、NetBackup PBX、EMM サービスを起動します。

- UNIX と Linux マスターサーバーで、次のコマンドを実行します。
 - `/usr/opensv/netbackup/bin/nbdbms_start_stop start`
 - `/opt/VRTSspb/bin/pbx_exchange`
 - `/usr/opensv/netbackup/bin/nbemmm -maintenance`
- Windows マスターサーバーで、次の Windows サービスを起動します。
 - NetBackup Relational Database Manager
 - Symantec Private Branch Exchange
 - NetBackup Enterprise Media Manager

メモ: NetBackup の起動コマンドと停止コマンドによって停止と起動が行われな
いため、PBX 処理はすでに動作していることがあります。

- 4 DR 環境の一部ではないメディアサーバーを無効にします。次のコマンドを実行しま
す。

```
nbemmmcmd -updatehost -machinename <Media Server> -machinestateop  
set_admin_pause -machinetype media -masterserver <Master Server>
```

- 5 DRドメインの任意のメディアサーバーが本番ドメインのメディアサーバーと同じ名前
である場合、EMM データベースからすべてのテープデバイスを削除します。次のコ
マンドを実行します。

```
nbemmmcmd -deletealldevices -allrecords
```

メモ: この手順はメディアサーバーで起こる可能性のあるデバイス構成の競合を解
決します。DRドメインのメディアサーバーは本番ドメインのメディアサーバーの名前
と異なる名前である場合は、この手順をスキップします。

- 6 NetBackup を再起動します。
- 7 必要に応じて、バックアップが自動的に開始されないようにすべてのバックアップポリシーを無効にできます。
 - NetBackup 管理コンソールを使ってバックアップポリシーを手動で無効にできます。
 - または `bppllist<policy> -set -inactive CLI` を実行します。
- 8 各メディアサーバーの NetBackup を開始することによって DR 環境の一部になるメディアサーバーを EMM に登録します。
- 9 デバイスの構成ウィザードを使って、新しいテープドライブとライブラリの構成を作成します。
- 10 NetBackup 管理コンソールを使ってすべてのリカバリメディアが非ロボットに設定されているかどうかを確認します。
- 11 非ロボットに設定される必要のあるリカバリメディアがまだある場合、次の操作を実行します。
 - ロボットメディアを選択し、右クリックして[移動 (Move)]を選択します。
 - [ロボット (robot)]フィールドを[スタンドアロン (Standalone)]に変更します。
 - [OK]をクリックして、変更を保存します。
- 12 すべてのリカバリメディアが非ロボットに設定されたら、[すべてのテープライブラリのインベントリの実行 (Inventory all the tape libraries)]フィールドでメディアが正しいライブラリで識別されていることを確認します。

これで本番データセンターにバックアップされているクライアントデータのリストア操作とリカバリ操作を開始できます。

完全カタログレプリケーションを使用した DR 環境の一貫性の保持

本番サイトで重要なインシデントが発生した場合は、基本的なリカバリが完了した後しばらくしてから DR サイトから操作してください。DR 環境が操作可能になったら、DR 環境の一貫性を保持するために次の追加のタスクを必要に応じて実行できます。

DR 環境の一貫性を保持する方法

- 1 カタログバックアップポリシーと、DR ドメインで必要な他のバックアップポリシーを修正し、有効にします。
- 2 もはや必要でないポリシーを削除します。
- 3 DR 環境の一部ではないメディアサーバーに関連付けられているストレージユニットを削除します。

部分的なカタログレプリケーションについて

部分的なカタログレプリケーションでは、イメージデータベース、ポリシー、クライアント構成のみを複製し、リレーショナルデータベースのコンポーネントの複製は行いません。これにより、ディザスタリカバリドメインでメディアサーバーとデバイスを事前設定できます。セカンダリマスターサーバーへのフェールオーバーの場合にそれらを再検出する必要はありません。

部分的なカタログのレプリケーションでは NetBackup カatalogのリレーショナルデータベースのコンポーネントを複製しません。そのため、バックアップをリストアするには、ディザスタリカバリのマスターサーバーにフェールオーバーした後で追加手順が必要です。

部分的なカタログレプリケーションに必要な環境の準備

リストア操作の実行に必要なカタログイメージメタデータはリレーショナルデータベースに保存されるので、リレーショナルデータベースのバックアップを一定の間隔で実行し、フラットファイル情報と共にレプリケートする必要があります。

- 1 リレーショナルデータベースのステージング領域がレプリケートされたストレージに配置されるように、ソース (実働) マスターサーバーの構成を変更します。この処理は次のようにして実行できます。

- レプリケートされたストレージに適切なディレクトリを作成します。
- 次のコマンドを使ってこのディレクトリをステージング領域にします。

```
nbdb_admin -vxdbms_nb_staging <directory>
```

- 2 スケジュールされたスクリプトで次のコマンドを実行して、リレーショナルデータベースをステージング領域に 1 日に数回 (理想的には 1 時間ごとに) バックアップします。

```
nbdb_backup -online <directory>-truncate_tlog
```

部分的なカタログレプリケーションでの環境のリカバリ

ソースマスターサーバーの消失の場合に (または障害リカバリテスト中) 次の手順を実行します。

- 1 プライマリサイトとセカンダリサイト間のレプリケーションが停止していることを確認します。

レプリケーションは、プライマリマスターサーバーが利用不能であるか、またはレプリケーションリンクが無効になれば停止します。

- 2 レプリケートされたボリュームをセカンダリマスターサーバーの適切なマウントポイントにマウントします。

- 3 対象の (ディザスタリカバリ) マスターサーバーでレプリケートされたストレージの場所にリレーショナルデータベースのステージング領域を指すのにコマンド `nbdb_admin -vxdbms_nb_staging <directory>` を使います。
- 4 レプリケートされたリレーショナルデータベースバックアップからメタデータをエクスポートするには、コマンド `cat_export -all -staging` を実行します。
- 5 アクティブなリレーショナルデータベースに、エクスポートされたメタデータをインポートするには、コマンド `cat_import -all` を実行します。
- 6 セカンダリマスターサーバーの **NetBackup** を起動します。
- 7 バックアップポリシーがレプリケートされたら、バックアップが自動的に開始されないようにすべてのバックアップポリシーを無効にします。
 - **NetBackup** 管理コンソールを使ってバックアップポリシーを手動で無効にできます。
 - またはコマンド `bppllist<policy> -set -inactive` を実行します。
- 8 セカンダリサイトのメディアサーバーを通してリストア操作を指示するように適切な **FAILOVER_RESTORE_MEDIA_SERVER** 設定が定義済みであることを確認します。
- 9 テープからバックアップをリストアするには、テープをテープライブラリに配置し、ライブラリのインベントリを実行することで、ディザスタリカバリマスターサーバーのカタログに追加する必要があります。テープが手違いでディザスタリカバリマスターサーバーを上書きしないようにするために、グローバルなスクラッチプールではなく、どのバックアップポリシーでも使用されていないボリュームプールにテープを追加するバーコードルールがあるはずです。テープには物理的に書き込みロックもするのが理想的です。
- 10 ディスクベースのバックアップのために、ストレージサーバーおよびディスクプールは、ディスクストレージサーバーウィザードの実行によってディザスタリカバリマスターサーバーに追加する必要があります。

ディスクストレージが存在する場合、ディスクメディア ID を調整する次のコマンドを実行してください。

```
nbcatsync -backupid <catalog backup ID> -prune_catalog
```

<catalog backup ID> 値はごく最近のカタログバックアップのバックアップ ID で、カタログバックアップのディザスタリカバリファイルにあります。テープが追加され、ディスクメディア ID が調整されると、リストア操作を開始できます。

ディザスタリカバリ環境と部分的なカタログレプリケーションを一致させる

実働サイトで重要なインシデントが発生した場合、リカバリ完了後しばらくしてからディザスタリカバリサイトで操作します。ディザスタリカバリ環境が操作可能になったら、ディザスタリカバリ環境の一貫性を保持するために次の追加タスクを必要に応じて実行できます。

ディザスタリカバリ環境と部分的なカタログレプリケーションを一致させるには

- 1 カatalogバックアップポリシーと、ディザスタリカバリドメインに必要な他のバックアップポリシーを変更し、有効にします。
- 2 もはや必要でないポリシーを削除します。

部分的なカタログレプリケーションを使ったテープ管理の注意事項

本番ドメインからのテープはディザスタリカバリドメインには割り当てられません。データベースに手動でテープを追加し、誤って上書きされることのないプールに配置する必要があります。これはまた、バーコード規則とロボットインベントリコマンドを組み合わせで使用することによっても実行できます。

ディザスタリカバリマスターサーバーにテープが割り当てられておらず、バックアップが期限切れになってもグローバルなスクラッチプールにリリースされないため、これらのテープを手動でリサイクルする必要があります。

注意: 注意すべきなのは、テープを手動でグローバルなスクラッチプールに移動するのは、有効なバックアップがないときだけだということです。

これを調べる最も簡単な方法は、`bpimagelist -d "01/01/1970 00:00:00" -media -l` と `vmquery -pn <private pool name> -b` コマンドを実行してリストを作成し、2つのリストを比較することです。2番目のリストにはあるのに、最初のリストにはないテープには、有効なイメージがないため、`vmchange -p <scratch pool number> -m <media id>` コマンドを実行してスクラッチプールに移動することができます。

完全カタログレプリケーションを使った NetBackup マスターサーバーの配備

この章では以下の項目について説明しています。

- [レプリケーションの注意事項について](#)
- [カタログレプリケーションを使用するクラスタ化されていない NetBackup マスターサーバーについて](#)
- [カタログレプリケーションを使う、グローバルにクラスタ化された NetBackup マスターサーバーについて](#)

レプリケーションの注意事項について

カタログレプリケーションを使って NetBackup を配備するには、実際の配備を計画するための次の要因を考慮してください。

表 5-1 レプリケーションの注意事項

注意事項	説明
マスターサーバーの注意事項	ベリタスは、マスターサーバーとメディアサーバーの両方として機能する 1 台のマスターサーバーを動作させることを推奨しません。異なるサイトで利用可能なストレージデバイスに互換性がなければ、それはストレージユニット定義とバックアップエラーに関する問題の原因となる場合があります。 カタログレプリケーションはカタログバックアップの代用にはならず、カタログは定期的にバックアップする必要があります。

注意事項	説明
ネットワークの注意事項	複数サイト単一メイン構成では、マスターサーバーは両方のサイトのメディアサーバーを制御します。メタデータはサイト間を通過する必要があります。このメタデータの通信はサイト間の標準 I/P リンクを介して送信されます。同じリンクはグローバルクラスタ制御のハートビートリンクとして使うことができます。Veritas は、この通信を処理するために少なくとも 10 Mb/秒、理想としては 100 Mb/秒のリンクをサイト間に提供することを推奨します。 ホストベースのレプリケーションが使われる場合、追加の I/P 帯域幅がレプリケーション層に必要になります。追加の帯域幅も考慮する必要があります。
DNS の注意事項	セカンダリサイトのマスターサーバーノードがプライマリサイトのマスターサーバーノードと異なるサブネットにあれば、DNS の変更がフェールオーバー処理の一部として必要になります。クラスタフェールオーバー処理の使用によって DNS の変更を自動的に開始できます。また、処理を手動で開始できます。バックアップシステムは変更が全面的に伝播されるまで正しく機能しません。これはサイトのフェールオーバーのリカバリ時間に影響する場合があります。 メモ: クラスタサービスグループによって DNS の変更を自動的に伝播するには、DNS のリソースを NetBackup の起動後にオンラインにする必要があります。
プライマリとセカンダリのマスターサーバーの注意事項	カタログのレプリケーション時にフェールオーバーを実行するには、プライマリとセカンダリのマスターサーバーで同じトポロジを使う必要があります。 プライマリとセカンダリのサイトマスターサーバーノードは、両方ともクラスタ化するかまたは両方とも非クラスタ化する必要があります。 メモ: 各サイトのクラスタマスターサーバーでノードの数が同じである必要はありません。 詳しくは、https://www.veritas.com/support/ja_JP/article.000090837 を参照してください。

カタログレプリケーションを使用するクラスタ化されていない NetBackup マスターサーバーについて

以降の項では、カタログレプリケーションを使用する、クラスタ化されていない NetBackup マスターサーバーのインストール、構成、操作のガイドラインについて説明します。

カタログレプリケーションを使用するクラスタ化されていない NetBackup マスターサーバーのインストールと構成

カタログレプリケーションを使用する、クラスタ化されていない NetBackup マスターサーバーのインストールと構成は [表 5-2](#) で記述されている複数の段階を通して進行します。

メモ: VxSS または NBAC はクラスタ化されていないマスターサーバーのカタログレプリケーションではサポートされません。NetBackup のアクセス制御 (NBAC) について詳しくは、次を参照してください。『[NetBackup™ セキュリティおよび暗号化ガイド](#)』。

表 5-2 カタログレプリケーションを使用するクラスタ化されていない NetBackup マスターサーバーのインストールと構成

手順	説明
段階 1	実際のインストールに進む前にサポートのすべての条件を満たしていることを確認します。 p.38 の「レプリケートされた NetBackup カatalogのサポートの条件について」 を参照してください。
第 2 段階	クラスタ化されていない NetBackup マスターサーバーをプライマリサイトにインストールし、構成します。 p.53 の「プライマリ NetBackup マスターサーバーのインストールと構成」 を参照してください。
段階 3	クラスタ化されていない NetBackup マスターサーバーをセカンダリサイトにインストールし、構成します。 p.56 の「セカンダリ NetBackup マスターサーバーのインストールと構成」 を参照してください。

プライマリ NetBackup マスターサーバーのインストールと構成

プライマリマスターサーバーは通常マスターサーバーとして機能するサーバーです。そのため、最初にインストールする必要があります。

以降の手順では、カタログレプリケーションを使用する、クラスタ化されていないプライマリマスターサーバーのインストールと構成のガイドラインについて説明します。

カタログレプリケーションを使用するクラスタ化されていないプライマリマスターサーバーをインストールおよび構成する方法

- 1 マスターサーバーの DNS エイリアス名を使ってください。DNS エイリアス名によってセカンダリマスターサーバーにスムーズなフェールオーバーが行われます。インストールを開始する前に、DNS でこのエイリアス名を定義し、プライマリマスターサーバーにマッピングします。マスターサーバーにこのエイリアス名を使うように NetBackup ドメインのすべてのメディアサーバーとクライアントを構成します。
- 2 プライマリマスターサーバーノードに NetBackup マスターサーバーをインストールします。マスターサーバーにエイリアス名を指定します。
- 3 インストールの完了後に NetBackup を停止します。
- 4 セカンダリマスターサーバーに切り替えたときに NetBackup が確実に正しく起動するために、server.conf と vxdbms.conf ファイルを修正します。

文字列が NB_<hostname> ではなく NB_<alias name> であるかどうかをこれら 2 つのファイルで確認し、必要に応じてファイルを修正します。

Windows マスターサーバーでは、これらのファイルは次の場所にあります。

- <install path>%VERITAS%\netbackupdb\conf\server.conf
- <install path>%VERITAS%\netbackupdb\data\vxdbms.conf

UNIX と Linux マスターサーバーでは、これらのファイルは次の場所にあります。

- /usr/opensv/var/global/server.conf
- /usr/opensv/db/data/vxdbms.conf

- 5 セカンダリマスターサーバーにレプリケートされるボリュームに、カタログコンポーネントを移動します。

Windows でのインストールの場合、共通のボリュームに次のパスをマッピングします。Windows 2003 および Windows 2008 のフォルダのマウントポイントか接合点を使います。Windows 2008 でのシンボリックリンクの使用について詳しくは、TechNote <http://www.veritas.com/docs/000019331> を参照してください。

- <install path>%VERITAS%\netbackup\%db
- <install path>%VERITAS%\netbackupdb\data
- <install path>%VERITAS%\netbackup%\vault\%sessions
- <install path>%VERITAS%\volmgr\%misc
- <install path>%VERITAS%\netbackup\var
- <install path>%VERITAS%\kms

UNIX と Linux でのインストールの場合、共通のボリュームの場所に次のパスをソフトリンクします。

- /usr/opensv/netbackup/db
- /usr/opensv/db/data
- /usr/opensv/netbackup/vault/sessions
- /usr/opensv/volmgr/database
- /usr/opensv/var
- /usr/opensv/kms

メモ: UNIX と Linux の /usr/opensv/db/data または Windows の <install path>%VERITAS %netbackupdb\data をリンクするのではなく、nbdb_move コマンドを使って EMM データベースを再配置できます。ただし、他のパスはすべてリンクする必要があります。

- 6 プライマリマスターサーバーで手動で起動し、停止することができるように NetBackup を構成します。デフォルトでは、NetBackup はマスターサーバーがブートされるとき自動的に起動します。

この自動的な起動を防ぐには、初回インストール後にパッチまたはアップグレードを適用した後、手順 7 と 8 にそれぞれ示す変更を行います。

- 7 NetBackup マスターサーバー上で次の変更を行います。

- UNIX と Linux マスターサーバーで、自動起動を有効にするためにインストール中に作成される /etc/init.d/netbackup へのリンクを削除します。
各オペレーティングシステムのリンクについて詳しくは、『[NetBackup インストールガイド](#)』を参照してください。
- Windows マスターサーバーで、サービスマネージャに移動し、すべての NetBackup サービスの[スタートアップの種類]を[手動]に設定します。

- 8 プライマリマスターサーバーの NetBackup を起動し、正しく起動することを確認し、次にそれを再び停止します。

この段階で、メディアサーバーとストレージデバイスを構成するために NetBackup の構成ウィザードを実行できます。

NetBackup を起動、停止するには次のコマンドを手動で実行します。フェールオーバーの手順としてこれらのコマンドを文書化することを推奨します。

UNIX と Linux マスターサーバーの場合:

- NetBackup を起動するには、次のコマンドを実行します。
/etc/init.d/netbackup start コマンド
- NetBackup を停止するには、次のコマンドを実行します。
/etc/init.d/netbackup stop

Windows マスターサーバーの場合:

- NetBackup を起動するには、次のコマンドを実行します。
`<install path>%VERITAS%\NetBackup\bin\bpup`
- NetBackup を停止するには、次のコマンドを実行します。
`<install path>%VERITAS%\NetBackup\bin\bpdown`

セカンダリ NetBackup マスターサーバーのインストールと構成

以降の手順では、カタログレプリケーションを使用する、クラスタ化されていないセカンダリマスターサーバーのインストールと構成のガイドラインについて説明します。

カタログレプリケーションを使用するクラスタ化されていないセカンダリマスターサーバーをインストールおよび構成する方法

- 1 プライマリマスターサーバーの NetBackup を停止します。
- 2 セカンダリマスターサーバーに DNS エイリアス名をマッピングします。
- 3 マスターサーバーのエイリアス名を指定してセカンダリマスターサーバーノードに NetBackup マスターサーバーをインストールします。インストール中に、セカンダリマスターサーバーにサーバーの同じリストを適用します。
- 4 インストールの完了後、NetBackup を停止します。
- 5 セカンダリマスターサーバーに切り替えたときに NetBackup が確実に正しく起動するために、`server.conf` と `vxdbsms.conf` を修正します。

文字列が `NB_<hostname>` ではなく `NB_<alias name>` であるかどうかを 2 つのファイルで確認し、必要に応じてファイルを修正します。

Windows マスターサーバーでは、これらのファイルは次の場所にあります。

- `<install path>%VERITAS%\netbackupdb\conf\server.conf`
- `<install path>%VERITAS%\netbackupdb\data\vxdbsms.conf`

UNIX または Linux マスターサーバーでは、これらのファイルは次の場所にあります。

- `/usr/opensv/var/global/server.conf`
- `/usr/opensv/db/data/vxdbsms.conf`

- 6 小さいディスクボリューム (100 MB) を作成し、プライマリサーバーのレプリケートされたボリュームに使われるのと同じマウントポイントにマウントします。

メモ: フェールオーバーの操作時に、レプリケートされたボリュームがセカンダリマスターサーバーにマウントされます。ディスクボリュームにはマウントされません。

7 このディスクボリュームにカタログコンポーネントを移動します。

Windows でのインストールの場合、共通のボリュームに次のパスをマッピングします。Windows 2003 および Windows 2008 のフォルダのマウントポイントか接合点を使います。Windows 2008 でのシンボリックリンクの使用について詳しくは、TechNote <http://www.veritas.com/docs/000019331> を参照してください。

- <install path>%VERITAS%\netbackup\db
- <install path>%VERITAS%\netbackupdb\data
- <install path>%VERITAS%\netbackup%\vault\sessions
- <install path>%VERITAS%\volmgr\misc
- <install path>%VERITAS%\netbackup\var
- <install path>%VERITAS%\kms

UNIX と Linux でのインストールの場合、共通のボリュームの場所に次のパスをソフトリンクします。

- /usr/openv/netbackup/db
- /usr/openv/db/data
- /usr/openv/netbackup/vault/sessions
- /usr/openv/volmgr/database
- /usr/openv/var
- /usr/openv/kms

8 NetBackup をセカンダリマスターサーバーで手動で起動および停止できるように、NetBackup を構成します。デフォルトでは、NetBackup はマスターサーバーがブートされるとき自動的に起動します。

この自動的な起動を防ぐには、初回インストール後にパッチまたはアップグレードを適用した後、手順 9 と 10 それぞれに示す変更を行います。

9 NetBackup マスターサーバー上で次の変更を行います。

- UNIX と Linux マスターサーバーで、自動起動を有効にするためにインストール中に作成される /etc/init.d/netbackup へのリンクを削除します。
各オペレーティングシステムのリンクについて詳しくは、『[NetBackup インストールガイド](#)』を参照してください。
- Windows マスターサーバーで、サービスマネージャに移動し、すべての NetBackup サービスの[スタートアップの種類]を[手動]に設定します。

10 セカンダリマスターサーバーの NetBackup を起動します。NetBackup が起動することを確認し、次に再び停止します。この段階で、メディアサーバーとストレージデバイスを構成するために NetBackup の構成ウィザードを実行できます。

NetBackup を手動で起動し、停止するには、次のコマンドを実行します。フェールオーバーの手順としてこれらのコマンドを文書化することを推奨します。

UNIX と Linux マスターサーバーの場合:

- NetBackup を起動するには、次のコマンドを実行します。
`/etc/init.d/netbackup start` コマンド
- NetBackup を停止するには、次のコマンドを実行します。
`/etc/init.d/netbackup stop`

Windows マスターサーバーの場合:

- NetBackup を起動するには、次のコマンドを実行します。
`<install path>%VERITAS%NetBackup%bin%bpup`
- NetBackup を停止するには、次のコマンドを実行します。
`<install path>%VERITAS%NetBackup%bin%bpdown`

- 11 NetBackup の停止後、プライマリサーバーにマウントされたディスクボリュームをマウント解除します (手順 6 を参照)。それからプライマリマスターサーバーに対する DNS エイリアス名をリセットします。プライマリマスターサーバーの NetBackup を再起動します。

レプリケートされた非クラスタ構成での NetBackup マスターサーバーのアップグレード

グローバルフェールオーバーが正しく働くようにするには、プライマリとセカンダリのサイトクラスタで同じバージョンの NetBackup を実行する必要があります。これは、両方のクラスタを同時にアップグレードする必要があることを意味します。アップグレード処理では、レプリケーションリンクを無効化し、各クラスタを個別にアップグレードする必要があります。アップグレードを処理するには、次の手順に従う必要があります。

レプリケートされた非クラスタ構成での NetBackup マスターサーバーのアップグレード

- 1 プライマリサイトとセカンダリのサイト間のレプリケーションを一時停止します。
- 2 標準アップグレード手順に従ってプライマリサイトマスターサーバーの NetBackup をアップグレードします (次を参照してください。『[NetBackup アップグレードガイド](#)』)。
- 3 基本的なバックアップを実行し、テストをリストアしてアップグレードが正常に終了していることを確認します。
- 4 セカンダリサイトマスターサーバーは、オンラインになるときにメディアサーバーとクライアントに接続できないように広域ネットワークから隔離します。
- 5 セカンダリサイトマスターサーバーをオンラインにして、レプリケートしたカタログボリュームをマウントします。

- 6 標準アップグレード手順に従ってセカンダリサイトマスターサーバーの NetBackup をアップグレードします (次を参照してください。『[NetBackup アップグレードガイド](#)』)。
- 7 アップグレードが完了したら、セカンダリサイトマスターサーバーをオフラインにします。これにより、セカンダリサイトカタログボリュームで時間のかかる可能性がある不要な後処理操作を避けます。
- 8 広域ネットワークにセカンダリサイトマスターサーバーを再接続します。
- 9 レプリケーション処理を再起動し、レプリケートしたボリュームを完全に同期できます。

カタログレプリケーションを使う、グローバルにクラスタ化された NetBackup マスターサーバーについて

このセクションでは、カタログレプリケーションを使う、グローバルにクラスタ化された NetBackup マスターサーバーのインストール、構成、操作のガイドラインについて説明します。

カタログレプリケーションを使うグローバルにクラスタ化された NetBackup マスターサーバーのインストールと構成

カタログレプリケーションを使用する、クラスタ化された NetBackup マスターサーバーのインストールと構成は [表 5-3](#) で記述されている複数の段階を通して進行します。

表 5-3 カタログレプリケーションを使用するクラスタ化された NetBackup マスターサーバーのインストールと構成

段階	説明	操作
段階 1	インストールの前提条件	実際のインストールに進む前にサポートのすべての条件を満たしていることを確認します。 p.38 の「レプリケートされた NetBackup カatalog のサポートの条件について」を参照してください。 p.51 の「レプリケーションの注意事項について」を参照してください。
段階 2	クラスタ化された NetBackup マスターのプライマリサイトへのインストールと構成	NetBackup マスターサーバークラスタをプライマリサイトにインストールし、構成します。 p.60 の「プライマリ NetBackup マスターサーバークラスタのインストールと構成」を参照してください。

段階	説明	操作
段階 3	クラスタ化された NetBackup マスターのセカンダリノードへのインストールと構成	NetBackup マスターサーバークラスタをセカンダリサイトにインストールし、構成します。 p.61 の「セカンダリ NetBackup マスターサーバークラスタのインストールと構成」を参照してください。

クラスタ化の注意事項について

両方のサイトの NetBackup マスターサーバーノードは、各サイトの単一ノードクラスタにもできますが、クラスタ化されたマスターサーバーとして構成する必要があります。

NetBackup マスターサーバーは常に、クラスタの単一ノードでのみ実行できます。レプリケートされた環境では、両方のサイトのクラスタのメンバーは効果的に単一のクラスタを形成します。必要になる耐性のレベルによって 2 つから 4 つのノードのグローバルクラスタを作成できます。

両方のサイトに単一ノードクラスタ この構成は 2 つのノード (各サイトに 1 つのノード) を必要とします。この構成は、関係するサーバーの観点では最も効率的です。この構成の不利な点はプライマリマスターサーバーのローカル問題がサイトのフェールオーバー操作を必要とすることです。

プライマリサイトに二重ノード、セカンダリサイトに単一ノード この構成は 3 つのノード (プライマリサイトに 2 つ、セカンダリサイトに 1 つ) を必要とします。正常な動作中は、各サイトに単一ノードがあるため、サイトのフェールオーバーはプライマリマスターサーバーの問題に対処するために必要ではありません。その代わりローカルのフェールオーバーを使うことができます。ただし、セカンダリサイトのノードの保護がありません。

一般的なベストプラクティスとして、この構成は推奨されます。

両方のサイトに二重ノード この構成は 3 つが常にアイドル状態である 4 つのノードを必要とします。この構成はサイトにローカルフェールオーバーの機能を与えます。この構成によって、ローカルサーバー問題が見つかって、フェールオーバーする必要はありません。

プライマリ NetBackup マスターサーバークラスタのインストールと構成

NetBackup マスターサーバークラスタをインストールするには、次に記述されている指示に従います。『NetBackup マスターサーバーのクラスタ化管理者ガイド』。カタログレプリケーションを使う NetBackup プライマリマスターサーバークラスタをインストールするには、次のガイドラインを参照してください。

カタログレプリケーションを使う NetBackup プライマリマスターサーバークラスタのインストール

- 1 NetBackup マスターサーバークラスタをプライマリノードにインストールしている場合は次の項目を指定します。
 - クラスタの共通ストレージのマウントポイントとしてレプリケートされたストレージ
 - ドメインの一部であるすべてのサーバー
 - セカンダリサイトクラスタを形成するサーバー
- 2 NetBackup のクラスタグループが作成された後、レプリケーション制御コンポーネントを含めるようにストレージリソースを再構成します。
- 3 一部のレプリケーション層 (特に Veritas Volume Replicator (VVR)) の場合には、レプリケーションエージェントは別のサービスグループにある必要があります。NetBackup アプリケーションサービスグループとエージェントをリンクしてください。
- 4 レプリケーション技術に帯域幅の計画と分析ツールが含まれる場合は、レプリケーション層を実装する前にこのツールを使って帯域幅の必要条件を評価することをお勧めします。レプリケーショントラフィックを把握するには、プライマリマスターサーバークラスタをインストール、構成し、数週間バックアップを作成します。セカンダリサイトにレプリケーションを実装する前に分析ツールを使って I/O トラフィックを測定し、ツールの推奨事項に基づくレプリケーション層を計画します。

セカンダリ NetBackup マスターサーバークラスタのインストールと構成

セカンダリ NetBackup マスターサーバークラスタをインストールし、構成するには、プライマリ NetBackup マスターサーバークラスタとノードの数が同じである必要はありません。セカンダリ NetBackup マスターサーバークラスタは単一ノードクラスタにできますが、クラスタ化する必要があります。カタログレプリケーションを使う NetBackup セカンダリマスターサーバークラスタをインストールするにはガイドラインを参照してください。

カタログレプリケーションを使う NetBackup セカンダリマスターサーバークラスタのインストール

- 1 インストールを開始する前に、プライマリサイトからレプリケートしたボリュームをマウントするマウントポイントを判断します。

この時点でレプリケートしたボリュームをマウントしないでください。代わりに、このマウントポイントに対して別のフォーマット済みボリュームをマウントします。インストール時に、このボリュームに空のカタログが作成されます。これは後で廃棄できます。
- 2 プライマリマスターサーバークラスタと同じ名前の仮想ホスト名を使ってセカンダリマスターサーバークラスタに NetBackup をインストールします。インストール時に、プライマリマスターサーバークラスタに設定したすべてのメディアサーバーを追加サーバーとして指定します。これにより、両方のクラスタのサーバーリストが一致します。

- 3 インストールが完了したら、**NetBackup** をシャットダウンしてクラスタの共通カタログボリュームをオフラインにします。
- 4 クラスタの共通ボリュームとしてプライマリサイトからレプリケートしたボリュームをマウントするには、クラスタ設定を更新します。この手順には、レプリケーションエージェントの追加またはディスクリソース内のレプリケーションの有効化が必要な場合があります。セットアップの次のフェーズ (**EMM** でサーバー表をポピュレートする) で指示されるまでこのリソースをオンラインにしないでください。インストール時に使うボリュームが不要になったら、別の用途に再利用できます。

注意: 自動的にレプリケーションの方向を逆転させるためにセカンダリサイトのレプリケーションエージェントを構成しないでください。プライマリサイトが再び稼働中になるまでレプリケーションを逆転させないでください。

EMM のサーバー表の表示

サーバー表は **EMM** で正しく表示する必要があります。サーバー表は、マスターサーバークラスタを各ノードへ次々とフェールオーバーすることによって自動的に表示できます。

EMM でサーバー表を表示するには、次の手順を参照してください。

EMM のサーバー表を表示する方法

- 1 セカンダリサイトのクラスタ設定が完了した後、プライマリサイトの **NetBackup** をオフラインにします。
- 2 レプリケーションの方向を逆転させ、セカンダリサイトの **NetBackup** をオンラインにします。

クラスタの特定ノードの **NetBackup** マスターサーバークラスタをオンラインにすると、自動的に **EMM** サーバー表の既知のサーバーのリストにそのノードが追加されます。セカンダリサイトに複数のノードがある場合には、マスターサーバーを各ノードにフェールオーバーする必要があります。
- 3 すべてのメンバーノードが追加された後、セカンダリサイトから **NetBackup** をオフラインにします。
- 4 レプリケーションの方向を逆転させ、プライマリサイトの **NetBackup** をオンラインにします。

クラスタ化されたレプリケーション構成での NetBackup のアップグレード

グローバルフェールオーバーが正しく働くようにするには、プライマリとセカンダリのサイトクラスタで同じバージョンの **NetBackup** を実行する必要があります。これは、両方のクラスタを同時にアップグレードする必要があることを意味します。アップグレード処理では、

レプリケーションリンクを無効化し、各クラスタを個別にアップグレードする必要があります。アップグレードを処理するには、次の手順に従う必要があります。

グローバルクラスタをアップグレードするには、次の手順を実行します。

- 1 アップグレード時にグローバルクラスタフェールオーバーを無効にします。
- 2 プライマリサイトとセカンダリのサイト間のレプリケーションを一時停止します。
- 3 セカンダリサイトクラスタは、オンラインになるときにメディアサーバーとクライアントに接続できないように広域ネットワークから隔離します。
- 4 標準アップグレード手順に従ってプライマリサイトマスターサーバークラスタの NetBackup をアップグレードします (次を参照してください。『[NetBackup アップグレードガイド](#)』)。
- 5 基本的なバックアップを実行し、テストをリストアしてアップグレードが正常に終了していることを確認します。
- 6 セカンダリサイトクラスタをオンラインにして、レプリケートしたカタログボリュームをマウントします。
- 7 標準アップグレード手順に従ってセカンダリサイトマスターサーバークラスタの NetBackup をアップグレードします (次を参照してください。『[NetBackup アップグレードガイド](#)』)。
- 8 アップグレードが完了したら、セカンダリサイトクラスタをオフラインにします。これにより、セカンダリサイトカタログボリュームで時間のかかる可能性がある不要な後処理操作を避けます。
- 9 広域ネットワークにセカンダリサイトクラスタを再接続します。
- 10 レプリケーション処理を再起動し、レプリケートしたボリュームを完全に同期できます。
- 11 グローバルクラスタフェールオーバーを有効にします。
- 12 アップグレードが正常に終了したことを確認するには、セカンダリサイトにフェールオーバーを実行し、基本的なバックアップを実行してテストをリストアします。
- 13 必要に応じて、プライマリサイトにグローバルクラスタをフェールバックします。

セカンダリマスターサーバークラスタへのフェールオーバー

次の場合にはセカンダリマスターサーバークラスタにフェールオーバーする必要があります。

- プライマリマスターサーバークラスタのすべてのノードが失敗します。
- プライマリサイトへのアクセスが拒否されます。

厳密なフェールオーバー手順はさまざまなレプリケーションテクノロジーに応じて変わることがあります。次に、セカンダリマスターサーバークラスタにフェールオーバーするおおまかな手順を示します。

セカンダリマスターサーバークラスタへのフェールオーバー

- 1 プライマリマスターサーバークラスタの NetBackup を停止します。
- 2 カタログボリュームのレプリケーションを停止するか、または逆転させます。
- 3 必要に応じて、マスターサーバーの新しい仮想 IP アドレスで DNS を更新します。
- 4 セカンダリマスターサーバークラスタの NetBackup を起動します。

メモ: プライマリサイトが失敗すれば手順 1 と 2 は自動的に行われます。

グローバルクラスタ環境では、セカンダリマスターサーバーへのフェールオーバー処理は自動化できます。処理を自動化するには、複数のハートビート接続がクラスタ間に存在する必要があります。プライマリマスターサーバークラスタが引き続き稼働している間、ハートビートネットワークのエラーによりセカンダリマスターサーバークラスタがオンラインになる場合があります。

クラスタ化されたレプリケーション環境での NetBackup マスターサーバークラスタのテスト

セカンダリマスターサーバークラスタが完全フェールオーバー操作に移行することなくオンラインになる機能をテストすることを推奨します。完全フェールオーバーの場合には、厳密な手順はさまざまなレプリケーションテクノロジーに応じて変わることがあります。

次に、テストのために実行する必要があるおおまかな手順を示します。

クラスタ化されたレプリケーション環境での NetBackup マスターサーバークラスタのテスト

- 1 プライマリとセカンダリのマスターサーバークラスタ間のレプリケーションを一時停止します。
- 2 ネットワークからセカンダリマスターサーバークラスタを隔離します。
- 3 セカンダリマスターサーバークラスタの NetBackup を起動します。
- 4 必須の検証チェックを実行します。NetBackup がセカンダリマスターサーバークラスタで動作していることを確認します。
- 5 セカンダリマスターサーバークラスタの NetBackup を停止します。
- 6 セカンダリマスターサーバークラスタのネットワーク接続を再確立します。
- 7 レプリケーションを再開します。

クラスタでの NetBackup を使用したバックアップおよびリストア

この章では以下の項目について説明しています。

- クラスタでの [NetBackup](#) を使用したバックアップとリストアについて
- クラスタでサポートされる [NetBackup](#) アプリケーションエージェントについて

クラスタでの [NetBackup](#) を使用したバックアップとリストアについて

この章では、クラスタ内のデータのユーザー主導バックアップおよびリストアを行う手順へのリンクについて説明します。また、バックアップおよびリストアを実行する具体的な手順については、他の [NetBackup](#) のマニュアルを参照してください。ユーザー主導のバックアップおよびアーカイブを実行する方法については、『[NetBackup バックアップ、アーカイブおよびリストアスタートガイド UNIX、Windows および Linux](#)』および [NetBackup エージェントとオプションへの関連情報のための『NetBackup 管理者ガイド』](#)。

バックアップとリストアの処理は、クラスタ環境であるか非クラスタ環境であるかにかかわらず同じです。詳しくは、『[NetBackup トラブルシューティングガイド UNIX、Windows および Linux](#)』バックアップ、アーカイブ、リストア処理の詳細については、次を参照してください。

クラスタでの NetBackup を使用したユーザー主導バックアップ

クラスタでユーザー主導バックアップを実行する場合、ノード名またはクライアントの仮想名を使用してバックアップを実行することができます。仮想名を選択した場合、バックアップは任意のクラスタノードからリストアできます。また、自動バックアップも構成できます。

Windows クライアントでユーザー主導バックアップを実行する方法

- 1 バックアップ、アーカイブおよびリストアコンソールを開きます。
- 2 [ファイル (File)]メニューで[NetBackup マシンの指定 (Specify NetBackup Machines)]をクリックします。
- 3 [ソースクライアント (Source client)]リストから、目的のノードまたは仮想名を選択 (または追加) します。

UNIX または Linux クライアントでユーザー主導バックアップを実行する方法

- 1 バックアップ、アーカイブおよびリストアコンソールを開きます。
- 2 [ログイン (Login)]ダイアログボックスで、クライアントの名前 (ノードまたは仮想クライアント名) を入力します。

目的のノードまたは仮想クライアントにログインする必要があります。Java インターフェースでは、ローカルクライアント以外のクライアントを指定することはできません。

クラスタ内のデータのリストアについて

すべてのファイルのリストア操作については、次の文書で説明されるリストア方法の手順に従います。『[NetBackup™ バックアップ、アーカイブおよびリストアスタートガイド](#)』。ファイルを共有ディスクドライブにリストアする場合は、それらのファイルを仮想サーバー名にリストアします。

各データベースファイルをリストアする場合は、データベースアプリケーションがインストールされているクライアントに対応する仮想サーバー名に、対象のファイルをリストアします。

メモ: クラスタ環境では、コンピュータに複数の仮想名があるため、複数のクライアント名のコンテキストでファイルをバックアップできます。バックアップポリシーを慎重に計画することで、この問題を回避できます。ただし、バックアップイメージを検索するために複数のクライアント名を参照する必要がある場合があります。また、必要なすべてのファイルをリストアするために、複数のリストアの実行が必要になる場合もあります。

バックアップ、アーカイブおよびリストアコンソールは、そのクライアント名のコンテキストで動作します。リダイレクトリストアを実行して、仮想サーバー名を使用してバックアップされた共有ディスクにファイルをリストアする必要があります。NetBackup では、NetBackup マスターサーバーで必要な構成を行った場合にのみ、リダイレクトリストアを実行できます。リダイレクトリストアを許可する方法については、次を参照してください。『[NetBackup 管理者ガイド Vol. 1](#)』。

この他にも、マスターサーバー上に適切な `altnames` ディレクトリエントリを作成することが必要な状況があります。NetBackup によってクライアントからのファイルのリストアが試行される時、処理が失敗し、次のエラーメッセージが表示される場合があります。

```
131 client is not validated to use this server
```

このメッセージが表示された場合、処理を成功させるためには `altnames` ディレクトリを設定する必要があります。たとえば、必要なネットワークインターフェースパラメータにクライアントの有効なネットワーク名が設定されているとします。しかし、この名前は、そのクライアントの NetBackup クライアント名パラメータと一致するとは限りません。この状況は、クラスタ内の NetBackup クライアントで頻繁に発生します。代わりに、サーバー主導リストアを実行して、`altnames` ディレクトリを設定せずに済むようにすることもできます。

p.67 の「例: NetBackup クラスタ内のユーザー主導リストアの実行」を参照してください。

例: NetBackup クラスタ内のユーザー主導リストアの実行

たとえば、クラスタ仮想サーバー名が `TOE`、クラスタノード名が `TIC` および `TAC` である とします。共有ディスク上のファイルは、クライアントリストに `TOE` を含む NetBackup ポリシーによってバックアップする必要があります。

共有ディスクでファイルのサーバー主導リストアを実行するには、ソースクライアントと宛先クライアントの両方を `TOE` に設定します。サーバー主導リストアでは、リストア時に共有ディスクを制御しているノードを認識する必要はありません。

NetBackup クラスタ内のファイルのユーザー主導リストアを実行する方法

- 1 マスターサーバー上に次のファイルを作成します。

UNIX または Linux サーバーの場合

```
/usr/opensv/netbackup/db/altnames/tic  
/usr/opensv/netbackup/db/altnames/tac
```

Windows サーバーの場合

```
shared_drive_install_path¥NetBackup¥db¥altnames¥tic  
shared_drive_install_path¥NetBackup¥db¥altnames¥tac
```

- 2 両方のファイルで、ファイル内の 1 行に仮想サーバー名 (`TOE`) を追加します。
- 3 共有ディスクを制御するノード (`TIC` または `TAC`) を特定します。
- 4 そのノードで、バックアップ、アーカイブおよびリストアインターフェースを起動し、ソースクライアントおよびサーバーとして仮想サーバー名 (`TOE`) を選択します。
 - Windows コンピュータでは、[ファイル (File)]メニューで[NetBackup マシンの指定 (Specify NetBackup Machines)]をクリックします。

- UNIX または Linux コンピュータでは、[処理 (Actions)]メニューで[NetBackup マシン (NetBackup Machines)]をクリックします。
- 5 共有ディスクから仮想サーバー名 (TOE) を使用して、バックアップファイルを参照し、必要に応じてリストアします。

クラスタでサポートされる NetBackup アプリケーションエージェントについて

クラスタ環境では特定のデータベースエージェントおよび NetBackup オプション製品のみがサポートされます。

クラスタでのデータベースエージェントおよびオプション製品のインストールおよび構成については、そのエージェントまたはオプション製品の管理者ガイドを参照してください。

クラスタ内のデータベースアプリケーションは、仮想サーバーとしてクラスタにインストールされます。これらの仮想サーバーのデータを保護するには、クラスタの各ノードに適切な NetBackup データベースエージェントをインストールします。Windows 版 NetBackup では、データベースエージェントは NetBackup サーバーおよび NetBackup クライアントと一緒にインストールされます。また、そのデータベースエージェント用にバックアップポリシーを作成します。クラスタ内にアプリケーションまたはデータベースのポリシーを構成する場合、ポリシー内のクライアント名として、常にそのアプリケーションまたはデータベースの仮想サーバー名を使用します。特定のデータベースエージェントのインストールおよび構成の手順については、そのエージェント用の NetBackup のマニュアルを参照してください。

ユーザーバックアップ クラスタの各ノードで実行するユーザーバックアップは、通常、NetBackup 仮想サーバーのバックアップではなく、ノードのバックアップとして実行されます。スケジュールバックアップを使用する方が、ユーザーバックアップより簡単にクラスタのデータを保護できる場合があります。

クラスタ内の
NetBackup クライアン
ト

クラスタ内に NetBackup クライアントのみをインストールすることができます。この構成では、ネットワーク全体のクラスタから、データを各 NetBackup サーバーへバックアップできます。この場合、テープデバイス、メディアなどに対する NetBackup 固有の構成作業が、クラスタ自体の設定や保守作業から分離されます。ただし、NetBackup クライアント自体のフェールオーバーは実行できません。

WSFC、VCS、SunCluster、Service Guard または HACMP クラスタに NetBackup クライアントをインストールする方法

NetBackup クライアントは、クラスタ環境でない場合と同じようにクラスタにインストールされます。NetBackup クライアントのインストール方法については、『NetBackup インストールガイド』を参照してください。Windows システムの場合、クラスタ上のデータをバックアップする際に名前解決に問題が発生する場合があります。(このデータは、ローカルデータまたは共有データのいずれかになります。) 各クライアントの[必要なネットワークインターフェース (Required network interface)]パラメータに、NetBackup クライアントをインストールするノードの完全修飾名を設定することを検討してください。

クラスタ内のデータベースファイルのバックアップについて

データベースアプリケーションは、仮想サーバーとしてクラスタにインストールされます。これらの仮想サーバーのデータを保護するには、クラスタの各ノードに適切な NetBackup データベースエージェントをインストールします。Windows 版 NetBackup では、データベースエージェントは NetBackup サーバーおよび NetBackup クライアントと一緒にインストールされます。また、そのデータベースエージェント用にバックアップポリシーを作成します。クラスタ内にアプリケーションまたはデータベースのポリシーを構成する場合、ポリシー内のクライアント名として、常にそのアプリケーションまたはデータベースの仮想サーバー名を使用します。特定のデータベースエージェントのインストールおよび構成の手順については、そのエージェント用の NetBackup のマニュアルを参照してください。

ユーザーバックアップについて

クラスタの各ノードで実行するユーザーバックアップは、通常、NetBackup 仮想サーバーのバックアップではなく、ノードのバックアップとして実行されます。スケジュールバックアップを使用する方が、ユーザーバックアップより簡単にクラスタのデータを保護できる場合があります。

クラスタ内の NetBackup クライアントについて

クラスタ内に NetBackup クライアントのみをインストールすることができます。この構成では、ネットワーク全体のクラスタから、データを各 NetBackup サーバーへバックアップできます。この場合、テープデバイス、メディアなどに対する NetBackup 固有の構成作業

が、クラスタ自体の設定や保守作業から分離されます。ただし、NetBackup クライアント自体のフェールオーバーは実行できません。

MSCS、VCS、SunCluster、Service Guard または HACMP クラスタに NetBackup クライアントをインストールする方法

NetBackup クライアントは、クラスタ環境でない場合と同じようにクラスタにインストールされます。NetBackup クライアントのインストール方法については、『NetBackup インストールガイド』を参照してください。Windows システムの場合、クラスタ上のデータをバックアップする際に名前解決に問題が発生する場合があります。(このデータは、ローカルデータまたは共有データのいずれかになります。)各クライアントの[必要なネットワークインターフェース (Required network interface)]パラメータに、NetBackup クライアントをインストールするノードの完全修飾名を設定することを検討してください。

L

LAN クライアントの保護 19

S

SAN クライアントの保護 20

SAN 接続の保護

動的マルチパス 13

SAN メディアサーバー

フェールオーバー非対応クラスタ構成 22

SAN メディアサーバーの保護

アプリケーションクラスタ 18

あ

オプション 68

か

仮想ストレージユニット。「スタンドアロンメディアサーバーを使った構成」を参照

メディアサーバーのアップグレード 27

カタログ全体のリストア 30

カタログの同期 40

カタログの保護

オンラインカタログバックアップ 21

カタログレプリケーション 21

「カタログレプリケーション」も参照

カタログリカバリ 28

完全カタログリカバリ 29

部分的なカタログリカバリ 32

カタログレプリケーション

カタログの同期 40

完全カタログレプリケーション 45

サポートの条件 38

注意事項。「レプリケーションの注意事項」を参照

複数サイトクロスドメインレプリケーション 43

複数サイト単一ドメイン 40

部分的なカタログレプリケーション 48

完全カタログリカバリ 29

カタログ全体のリストア 30

完全カタログリストア 45

完全カタログレプリケーション 45

カタログ全体のリストア 45

クラスタ化されたマスターサーバー

NetBackup のアップグレード 62

アップグレードボリューム 61

カタログレプリケーションでのテスト 64

サーバー表 62

セカンダリマスターサーバーのインストール 61

プライマリマスターサーバーのインストール 60

クラスタ化されていないマスターサーバー

NetBackup のアップグレード 58

アップグレードボリューム 56

セカンダリマスターサーバーのインストール 56

プライマリマスターサーバーのインストール 53

クラスタ内の NetBackup クライアント 69

クラスタ内のデータのリストア 66

さ

サイトの保護

グローバルクラスタ 20

障害点

LAN クライアント 19

SAN クライアント 20

SAN メディアサーバー 18

コンポーネント 11

サイト 20

ストレージデバイス 14

ストレージデバイスの接続 13

SAN 接続 13

専用のメディアサーバー 16

ネットワークリンク 13

非専用のメディアサーバー 17

マスターサーバー 15

メディアサーバー 16

メディアの可用性 14

スタンドアロンメディアサーバーの前提条件 22

ストレージデバイスの保護

冗長なドライブ 14

ストレージユニット

ロボットデバイス用の構成 24

専用のメディアサーバーの保護
ストレージユニットグループ 16

た

ディスクストレージユニットの追加 26
ディスクリカバリ 34
データベースエージェント 68
データベースファイルのバックアップ 69

な

ネットワークリンクの保護
冗長ネットワークのチーミング 13

は

バックアップ
ユーザー主導 66
非専用のメディアサーバーの保護
ストレージユニットグループ 17
フェールオーバー非対応クラスタ構成
SAN メディアサーバー 22
メディアサーバー 22
複数サイトクロスドメインレプリケーション
BasicDisk ストレージ 43
複数サイト単一ドメインレプリケーション 40
拡張 SAN 41
最適化された複製 42
部分的なカタログのリストア 33
部分的なカタログリカバリ 32
部分的なカタログのリストア 33
部分的なカタログレプリケーション 48
保護方式
LAN クライアント 19
SAN クライアント 20
SAN 接続
動的マルチパス 13
SAN メディアサーバー
アプリケーションクラスタ 18
サイト
グローバルクラスタ 20
ストレージデバイス
冗長なドライブ 14
専用のメディアサーバー
ストレージユニットグループ 16
ネットワークリンク
冗長ネットワークのチーミング 13
非専用のメディアサーバー
ストレージユニットグループ 17

マスターサーバー
クラスタ化 15
メディアの可用性
グローバルなスクラッチプール 14
メディアの共有 14
ロボット制御接続
制御サーバークラスタ 13
冗長な接続 13

ま

マスターサーバーの保護
クラスタ化 15
メディアサーバー
バックアップのリストア 18
フェールオーバー非対応クラスタ構成 22
メディアの可用性の保護
グローバルなスクラッチプール 14
メディアの共有 14

や

ユーザー主導バックアップ 66
ユーザーバックアップ 69

ら

レプリケーションの注意事項 51
DNS の注意事項 52
クラスタ化の注意事項 60
ネットワークの注意事項 52
マスターサーバーの注意事項 51
ロボット制御接続の保護
冗長な接続 13
制御サーバークラスタ 13